

海底の魔術師

江戸川乱歩

青空文庫

沈没船の怪物

日東サルベージ会社の沈没船引きあげのしご」とが、房総半島の東がわにある大戸村の沖あいでおこなわれていました。

その海の底に、東洋汽船会社の千五百トンの貨物船「あしひき丸」が沈没しているのです。ひと月ほどまえのあらしの晩に、「あしひき丸」は航路をまちがえて、海の中の大きな岩にぶつかり、船の底がやぶれて、そこへしづんだのです。

この沈没船の引きあげをたのまれたサルベージ会社の作業船は、「あしひき丸」のしづんでいる海面に行つて、どんなふうにして引きあげたらよいかをしらべるために、まず、ふたりの潜水夫を海の底へおろしました。

あついゴム製の服をきて、まるい鉄のかぶとをかぶり、おもい鉛のついたくつをはいて、ふたりの潜水夫は、作業船の外がわについた鉄ばしりを、つたいおり、ブクブクとあわをたてて、青い海の中へ、はいつていきました。空気を送るくだと、いのち綱が、グングンのびていきます。

そこは、海の中の岩山のようなところで、大きな岩がもりあがつていて、底はあんがい浅いのです。水面から三十メートルぐらいで、もう海の底へついてしまいます。

三十メートルもおりると、海の中は夕やみのよう暗いので、潜水夫はつよい光の水中電灯をさげています。電線は、いのち綱にからませて作業船の上につづいています。かれらは、その電灯をふりてらしながら、コンブなどの海草が、人の背よりも高くはえしげつて、ヒラヒラと、ゆれている中を、かきわけるようにして進みました。

むこうの方に、どす黒い巨大な怪物のようなものが、ボンヤリ見えています。それが沈没船なのです。ふたりの潜水夫は、鉄かぶとのうしろから、送気管そうきかんといのち綱を、ゆらゆらとあとに引きながら、その黒い船体へ、近づいていきました。鉄かぶとについている、まるいガラスののぞきまどの、すぐ前を、いろいろなさかなが、すいすいと泳いでいきます。大きなサメなどが、ヌーツとあらわれて、鉄かぶとに、ぶつかつてくることもあります。

ふたりは、やがて、沈没船にたどりついて、きずついた場所をしらべはじめました。横だおしになつた黒い船体のそばを、ともの方からへさきにむかつて、水中電灯をてらしながら、歩いていくのです。沈没船は、海の底の大きな鉄の家のようでした。その長い長い

鉄の壁にそつて歩いていくのです。

しばらく歩くと、先にたつていた潜水夫が、電灯を上下に動かしてあいざをしました。きずついている場所を見つけたのです。

船の底の鉄板が巨人の舌のようにペロツとめくれて、人間がふたりも通れるほどの大きな穴があいていました。こんな穴から、水が滝のように流れこんでは、どうすることもできなかつたでしよう。

ふたりの潜水夫は、そのやぶれ穴の大きさをはかるために、水中電灯を近づけました。すると、穴の中から、チラツとのぞいたものがあります。とつさに、大きさかなが、いるのではないかとおもいましたが、さかなではありません。なんだか人間にているのです。それも、ふつうの人間ではなくて、おそろしく大きな人間の顔のようを感じられました。

しかし、この沈没船には、人間の死体がのこつてゐるはずはないのです。乗組員はぜんぶ、すくいだされていたからです。しかも、いまチラツとのぞいたのは、死体の顔ではありません。いきた人間、いや、人間にた、へんなものでした。

潜水夫たちは、海の底で、いろいろなおそろしいものに出あつていますから、ちょっと

ぐらいのことには、おどろかないのですが、いまチラツとのぞいたやつは、なんだか、ひどくうすきみのわるいものでした。さすがの潜水夫たちも、こわくなつてきました。

ふたりは、そこに立ちすくんで、しばらく顔を見あわせていましたが、ひとりが水中電灯の光の前で右手をヒラヒラと動かしました。ことばのかわりの手まねなのです。潜水かぶとの中には、電話そうちがあつて、作業船の上の人たちと話ができますけれど、潜水夫どうしが電話で話しあうことはできません。おたがいの手に電線をしかけて、手をにぎりあえれば電話が通じるしきけもあるのですが、ふつうは、そういうしきけをしていないのです。

日本の潜水夫は、いまのような、すすんだ潜水服ができないむかしから、海の底にもぐることがじょうずでしたから、水の中で手まねで話すことにも、なれています。ちょうどおしが手まねで話をするように、潜水夫も手まねだけで、なんでも話すことができるのです。

「きみはこわいのか。」

ひとりの潜水夫の手まねは、そういつていきました。そんなふうにきかれると、いじにも「こわい。」などとはいえません。

「こわいもんか。中へはいつてみよう。」

もうひとりの潜水夫が手まねでこたえました。

「きみ、さきにはいれ。」

「いや、きみの方が、穴に近いじゃないか。きみ、さきにはいれ。」

ふたりが、さきをゆずりあつてているのは、じつはこわいからです。しかし、日本の海難救助員が勇敢なことは世界じゅうに知られています。その日本潜水夫の名誉にかけてもこわいなどとはいえません。あやしいものを見て、にげだしたことがわかれれば、なかまの、もの笑いです。

「それじや、手をつないで、いつしょにはいろう。」

「うん、それがいい。」

ふたりは、手をつないで、船体のやぶれ穴の中へ、はいつてみることになりました。

穴の中は、荷物を入れる大きな部屋のようでしたが、水中電灯の光は、それほどつよくないので、部屋の中のむこうの方はまつ暗で、なにがかくれているかわかりません。

ふたりは、穴のふちをまたいで、すべるように、ふわっと船の中にはいつていきました。

そして、ひどくかたむいている船倉の床を、だんだん、おくの方へ歩いていくのでした。

箱づめや、コモづつみの荷物が、ゴロゴロしています。かるい荷物は浮きあがつて、部屋のてんじょうにくつづいています。また、フワフワと、目の前にただよつているものがあります。

そのあいだを、大きいのや小さいのや、いろいろのさかなが泳ぎまわつてているのです。それが水中電灯のそばに近よると、うろこが、赤みがかった金色や、青みがかった銀色に、キラキラと、うつくしく光るのです。

このふたりは、ながいあいだ潜水夫をやつてている人たちでしたから、こういう船倉の中にただよつてている人間の死がいも、かずしれず見ていました。水ぶくれになつた死体、もう骨ばかりになつた死体など、きみのわるいものには、なれっこになつていています。ですから、さつきチラツとのぞいたやつが、人間の死体でないことは、よくわかつていました。むろんさかなでもありません。なんだか、えたいのしれないものでした。いまにも、むこうの荷物のかけから、さつきのやつが、ヌーツとあらわれるのではないかとおもうと、ものなれた勇敢な潜水夫たちも、氣味がわるくて、背中が、ぞくぞくしてきました。

しかし、その船倉の中には、べつにあやしいものも見えません。一方の壁に船倉からつぎの部屋へ行くドアが、ひらいたままになつています。そのむこうは、どうやら機関室ら

しいのです。

「こへ、はいつてみようか。」

「うん、よかろう。」

手まねで話しあつて、ふたりはそのドアのむこうへ、ふみこんでいきました。

大きな蒸気機関が、よどんだ水の中に、しづまりかえつていきました。機械の死がいとうかんじです。機械でも動いているときは生きているのですから、それが死にたえたようじつとしているのは、なんとなくぶきみなものです。

ふたりが、そこへはいつて、二一三歩あるいたときです。じつにふしげなことが、おこりました。死んでいる機械の一部分が、ゴトゴト動きだしたのです。

ふたりは、ギョツとして立ちすくみました。沈没して一ヶ月もたつた機械が動きだすはずがないからです。しかし、じつと見ていて、機械の一部が、たしかに動いているではありませんか。

そのうちに、機械の一部が、機関をはなれて、スーツと、こちらへただよつてくるように見えました。機械のおばけのようなものです。ふたりの潜水夫は、鉄かぶとの中で、「ワーッ。」とさけんで、にげだしました。両手で水をかきながら、死にものぐいで、

にげだしました。

そのとき、ふたりははつきりと、ばけものの姿を見たのです。それは、なんともいえない、おそろしかつこうをしていました。

生きている機械でした。いや、機械のような生きものでした。そいつには頭があり、両手があり、それからワニのようなしつぽがありました。それがみんな、機械のように鉄でできているらしいのです。

黒い鉄の頭は、人間の倍ほどもありました。ちょうど潜水服の鉄かぶとと、おなじぐらいいの大きさです。その顔に、大きくぼんやり目がふたつ、海底のうすやみの中でも、ギラギラ光っていました。口は耳までさけていて、するどい牙^{きば}がはえていました。その怪物は、ふとい鉄の棒のような両手で、「こちらへおいで。」というような、手まねきをしていましたが、その鉄のゆびのさきには、ワシのようなするどいツメがはえていました。胴体もしつぽも鉄でできているらしく、背中からしつぽにかけて、鳥のトサカのような、動物のタテガミのような、とんがつたギザギザのものが、ずっと、つづいていました。人間とワニとのあいの子で、しかもそのからだが鉄でできているという、なんともいえない、いやらしい怪物でした。

ふたりの潜水夫は、生きたこちもなく、船倉のやぶれ穴から、外へにげだすと、かぶとの中の電話で、

「たいへんだ。はやく、引きあげてくれ！」

と、作業船によびかけるのでした。

ふたりの潜水夫が作業船に引きあげられ、海底の怪物のはなしをしますと、それから大きさわぎになつて、あくる日は、海上自衛隊まで出動して、海底の大搜索がはじめられたのですが、沈没船の中をいくらさがしても、怪物はふたたび、姿を見せませんでした。

そこで、おしまいには、ふたりの潜水夫が、海の底でまぼろしを見たのだろう、ということになつてしましました。

潜水夫たちは、

「あれがまぼろしであつて、たまるものか。われわれは、そいつの姿をはつきり見たのだ。ふたりがそろつて、まぼろしを見るなんてことがあるもんか。」

と、いいはりましたが、だれも信用してくれません。

ふたりの潜水夫は、それでは、おれたちが、もう一度もぐつて、しらべてみるといつて、

沈没船の中を、くまなくさがしたのですが、二度と怪物に出あうことはできませんでした。

鉄の人魚

やはり、そのころ、潜水作業のおこなわれていた近くの海岸にある大戸村に、ふしぎなことがおこつていました。

大戸村は漁師ばかりのすんでいる、さびしい村でしたが、その村の漁師の子に、^{さなだい}真田一郎^{ちろう}という少年がありました。

おとうさんは、発動機のついた漁船をもつていて、村いちばんの漁の名人でした。一郎君は近くの町の中学校の一年生で、ゆくすえは、おとうさんよりも、りっぱな漁師になつて、遠洋漁業をやりたい希望でした。そのために、専門の学校へ入れてもらうやくそくが、ちゃんとできているのです。

そういう少年ですから、海が、なによりも好きでした。泳ぎもじょうずで、四キロぐらいいは、へいきで泳げましたし、やすみには、おとうさんの船にのつて、漁のおてつだいに出るのが、いちばんのたのしみでした。船にものれないし、泳ぎもできないときには、学校から帰ると、村はずれの高い岩山の上から、太平洋をながめるのが、日課のようになつ

ていました。

たつたひとりで、岩山のてっぺんに腰をおろして、ひざの上にほおづえをついて、じつと、いつまでも、海をながめているのです。はるかむこうのアメリカ大陸まで、無限にひろがっている広大な海、なんとのびのびとした、美しいけしきでしよう。同じ海でも、その美しさは、時によつて、びっくりするほど、ちがつて見えるのです。まるでかがみのような静かななぎのとき、海一面があわだち、にえたぎるような、あらしのとき、朝日、夕日によつかにいろどられた海、満月の光で銀色にかがやく海、そのひとつひとつが、みんな、たましいもどろけるように、美しいのです。

その夕方も、一郎君は、学校から帰ると、いそぎの宿題をすませてから、うちをかけだして、岩山の上にのぼり、そのてっぺんに腰をおろして、なつかしい巨大なおかあさんのような海に、じつと見いつっていました。

しばらくすると、大空にたなびいている長い雲が、黄色くなり、やがて、だんだん赤くなつて、まるで色ガラスのようなまつかな色になり、それがひろい海にまでそまつて、見わたすかぎりの水が、えのぐをとかしたように、美しくかがやくのでした。ふりむくとたらいのよう大きなまつかな太陽が、いま、うしろの山にかくれようとしているのです。

そのときでした。一郎君はふと岩山の下の波うちぎわを、見おろしましたが、そこの岩の上に、なんだか黒いみょうなものが、うごめいているのを発見し、はつとして、目をこらしました。

二十メートルも下の海岸ですから、こまかいことはわかりませんが、今まで、一度も見たことのない、ふしぎなものが、そこの岩の上にうずくまつているのです。

「あつ、黒い人魚だ！」

一郎君は、おもわず声をたてました。そのものは、さかなのしつぽの上に人間のからだがついているような形をしていました。からだはまつ黒で、ゴツゴツしていますけれど、その形は、なにかの絵で見た人魚とよくてていました。

絵の人魚はウロコのあるさかなのしつぽの上に、美しいはだかの女人が、長い黒髪を、うしろにたらしているのですが、いま目の下にいる人魚は、まつ黒で、なんだか鉄でもできているように、四角ばつて、がんじょうに見えるのです。また、さかなのようなしつぽも、ウロコが銀色にひかっているのではなくて、ワニのように、かたいいかめしいしつぽのようです。

一郎君は、人魚なんて、じつさいにあるものではないと信じていました。その、この世

にいなはずの人魚が、しかも鉄のようないかめしい人魚が、いま、目の下の岩の上に動いているのを見たのですから、じぶんの目を、うたがわないでいられません。頭がどうかしたのではないかと、おそろしくなつてきました。

しかし、一郎君は勇気のある少年でした。おそろしいものを見たからといって、びつくりして、にげかえるような弱虫ではありません。にげるどころか、はんたいに、もつと近くから、あの怪物の姿をはつきり見きわめてやろうと決心したのです。

うらみちづたいに、岩山をかけおりて、海岸にあるトンネルのような岩のかげから、そつと怪物をのぞきました。怪物のこしかけている岩は、つい目のさき十メートルほどのところにあるのです。

もう太陽がすっかりしづんで、空はネズミ色に、海はどす黒くなつていました。岩のならんだ波うちぎわに、白い波がはげしくうちよせていました。そのひとつつの岩の上に、黒い鉄のような生きものが、むこうをむいて、じつとしていました。十メートルのちかさで見る怪物は、ぞつとするほど、おそろしい姿でした。背中のトサカみたいなものは、まるで剣をならべたように、するどくとがつています。大きなしつぽは鉄のワニのようで、動くとガチャガチャと音がしそうです。

一郎君のいきづかいが、はげしくなつてきました。いつたい、こんなおそろしい怪物が、太平洋にすんでいたのでしょうか。ふかいふかい海の中の谷ぞこには、動物学者も知らないうような怪物がいると、きいていましたが、それがひよっこり、この日本の海岸へ、姿をあらわしたのでしょうか。

ドキドキする胸をおさえて、そんなことをかんがえていたとき、怪物が身動きをしました。そして、とつぜんぐるつとこちらをふりむいたのです。

一郎君は、心臓がのどまでとびあがるような気がしました。ああ、その怪物の顔！ 一郎君は一生がい、わされることはどうないでしよう。背中の、するどいトサカが、頭の上までつづいていました。ほら穴みたいに、くぼんだ、大きなふたつの目が、リンのように青く光っていました。口は耳までさけてそのくちびるのあいだから、ニューッと牙がつきだしていました。

一郎君は、それを見たしゅんかんに、岩かげに身をかくしましたが、怪物の方ではもうちゃんと気づいていました。

「ジャ、ジャ、ジャ、ジャ……。」という、鉄と鉄がすれあうような、気味のわるい大きな音がひびいてきました。あとでわかつたのですが、それは怪物の笑い声だつたのです。

「カクレテモ、ダメダ。オレハ、シツテイルゾ。デテコイ、ソシテ、オレノイウコトヲキケ。」

怪物の声でした。この海底のばけものは、日本語をしゃべるのです。しかし、発音はひどくあいまいで、やっぱり鉄のすれあうような音で、よほど注意しないとききとれないのです。

一郎君はもうだめだとおもいました。この怪物につかまえられて海の底につれていかれのだと、決死のかくゞをきめました。そして、勇敢にも岩かげから顔を出して、怪物とにらみあつたのです。

「キミハ、ツヨイネ、エライコドモダ。キミナラ、オレノイウコトヲ、ミンナニ、ツタエテクレルダロ。イイカ、ヨクキケ。オレハ、ウミノソコノ、マモノダ。コノムラニハ、モウコナイ。シカシ、マモナク、ニツポンジユウガ、オオサワギニナルダロ、オレガ、シゴトヲ、ハジメルカラダ。ミンナニ、ソウイツテオケ、ウミノソコノ、マモノガ、イヨイヨ、ニツポンニ、ジヨウリクシタト、ソウイツテオケ。ワカツタカ。」

そして、また、「ジャ、ジャ、ジャ、……。」と鉄のすれあう笑い声をたてたかとおもうと、ドブンという音がして、たちまち、怪物の姿は見えなくなつてしましました。白しらな

波み
さかまく海の中へ、とびこんだのです。

鉄の小箱

お話をわって、こちらは東京のできごとです。大戸村に鉄の人魚があらわれてから十日ほどのちのことでした。

世田谷区に住んでいる、中学二年生の宮田賢吉という少年が、ある夜、友だちのところからおうちへ帰るのに、近みちをして、神社の森の中を歩いていました。外は、夜になるとだれも通らないさびしい道で、ふつうの子どもでしたら、こわくて、とても近みちなどできないのですが、宮田賢吉君は、少年探偵団の団員でしたから、暗い森の中をひとりで歩くのが、かえつておもしろいくらいでした。

神社の森は、たいへん広くて、大きな木が立ちならび、その枝が空をおおつて、ひるまでもうす暗いほどですから、夜は星も見えない、まつ暗やみです。ところどころに街灯が立つてているのですが、その光は木の葉にさえぎられて、遠くまではとどきません。道ばたにならんでいる石どうろうが、大入道のおばけのように見えて、じつに、うすきみがわる

いのです。

賢吉君は、口笛をふきながら足ばやに歩いていましたが、森のまんなかほどまでくると、じぶんの足音のほかに、もうひとつ別の足音が聞こえるような気がしました。おやつとおもつて、口笛をやめて、耳をすましながら歩いていますと、たしかに、べつの足音がしていません。じぶんの足音が、森にこだまして、二じゅうに聞こえるのではありません。もうひとつ別の足音はパタパタと、ひじょうにはやく、走っているように聞こえるのです。

賢吉君は、ためしに立ちどまつてみましたが、それでもパタパタという足音はつづいています。

やつぱり、だれかが、うしろから走つてくるのです。

ふりむくと、たちならぶ石どうろのあいだから、黒いものがパツとこちらへとびだしてくるのが見えました。おとなのです。悪ものかもしれません。賢吉君をおつかけてきたのかもしません。そして、お金をとろうとするのではないでしょうか。

しかし、賢吉君はにげだしもしないで、じつと、もとのところに立つていました。

男は、たちまちそのそばに近づいて、

「おい、きみ、たのみがある。だいじなたのみがある。きいてくれ。」

と、息せききつて、いうのでした。

「ぼくにですか。」

「うん、そうだ。おれは、いま、悪ものにおつかれられているんだ。これをあずかつてくれ。おれの命よりもだいじなものだ。きみのうちはこの近くか?」

「ええ、すぐ近くです。」

「それじゃ、これをきみのうちに持つて帰つて、うちの中のだれにもわからぬ場所へ、かくしておくのだ。この箱の中には、おそろしい秘密がふうじこんである。悪ものどもが、その秘密をぬすみだそうとして、おれを殺すかもしれない。もし、おれが死んだら、この箱は川の中へでもすててくれ。だが、おれが生きているあいだは、けつしてするんじやない。きつとかえしてもらいたいにいくから、それまで、だれにも気づかれない場所へ、かくしておいてくれ。わかつたな。おれにとつちや、命よりもだいじな品物だからね。いいか。

暗やみながら、そうして話しているうちに、男の顔かたちが、おぼろげに見わけられました。黒い背広をきています。しわになつた、きたない背広です。としは五十以上でしょう。しわの多い、ヒゲむじやの顔です。ヒゲをのばしているわけではなく、いく日も、か

みそりをあてないので、ぶしょうヒゲでほおがまつ黒になつてゐるのです。そのうすきみのわるい男が、小さな黒い箱をだいじそうに両手でさしだしてゐるのです。

賢吉君は、小箱をうけとつていいのかどうか、決心がつきかねて返事もしないでいまと、男はしきりにうしろをふりかえつて見ながら、

「はやく。はやく、これをうけとつてくれ。おれは、惡ものにおつかれられているんだ。いまにも、ここへやつてくるかもしれない。そうすれば、もうおしまいだ。惡ものは、この小箱をねらつてゐるんだ。さ、はやく。」

男はそういうて、またうしろをふりむいていましたが、なにか遠くの音を聞きつけたらしく、ハツとなつて、

「来た。やつて來た。もうだめだ。一生のおねがいだ。これを持つていつて、かくしてくれ。けつして惡ものにとられるんじやないぞ。さ、うけとつてくれ。そして、そこの大きな木のうしろにかくれてゐるんだ。にげだしちやいけない。あいてはおとなだから、にげたら、すぐつかまつてしまふ。いいか、わかつたね。」

小箱はいつのまにか、賢吉君の手にわたつていました。鉄でできているらしく、小さいわりにはひどく重い箱でした。男が賢吉君の背中をつきとばすようにしましたので、賢吉

君は、おもわずよろよろとして、一本の大きな木のみきのうしろにかくれました。そこは、街灯の光が、まつたくとどかない、まつ暗やみですから、けつして、悪ものに見つかる心配はないのです。

賢吉君がかくれたのを見さだめると、男はやにわに走りだしましたが、よほどつかれているらしく、あまりはやくは走れません。うしろの方からは、いきおいのよい足音がせまつてきました。パツパツパツパツと、おそろしく早いくつ音です。

そつと木のみきからのぞいている賢吉君の目の前に、風をきつてひとりの若ものの姿があらわれました。なんだか、はでなしまの背広をきた、ヨタモノみたいなやつです。たちまち、にげる男に追いつきました。

「まてつ、さあ、もうにがさんぞ。きさまが鉄の箱を持つてにげたことは、ちゃんとしつているんだ。あれをこつちへよこせ。」

若もののふてぶてしいどなり声に、五十男は、よわよわしく答えていきます。

「鉄の箱なんておれはしらない。さあ、見るがいい。おれはどこにも、そんなもの持つてやしない。」

若ものは、五十男のからだじゅうをさがしているようでした。しかし、鉄の箱は、と

つぐに賢吉君の手にわたつてゐるのですから、どこからも出でくるはずはありません。
 「ちくしょう。どこかへかくしたな。さあ、はくじょうしろ。どこへかくした。いわないと、いたいめをさせるぞ。」

若ものは、五十男の手をにぎつて、背中の方へねじあげて います。しかし、男は 一言も答えません。そればかりか、いまは死にものぐるいになつて、パツとその手をふりきるといきなり、若ものにつかみかかつていきました。

おそろしい格闘がはじまつたのです。

ふたりは、暗やみの中で、くんずほぐれつとつくみあい、そのままおれで、上になり下になり、地面をゴロゴロころがりまわつていました。が、五十男が若いヨタモノにかなうはずはありません。いつのまにか、若ものにくみしかれて、氣味のわるいうなり声を出していました。

若ものは、五十男の上に馬のりになつて、両手でその首をしめつけて いるのです。下の男は死んでしまうかもしません。もうぐつたりとなつて、声をたてることもできないようです。

賢吉君は、木のかげから飛びだして いつて、助けてやろうかと思つましたが、そんなこ

とをしても、ヨタモノにかかるはずはないのですから、鉄の小箱をとられてしまうかもしれません。とられては男にすまないので。命をすてても、かくしたいと思つてゐる小箱ですから、どんなことがあつても、ヨタモノにわたすことはできません。

そんなことをいそがしく考えて、ためらつてゐるうちに、若ものが手をはなして立ちあがつたようです。

「命はたすけてやる。鉄の箱を手にいれるまでは、きさまを生かしておかなくちや親分にしかられるからな。これから帰つて、親分とそうだんして、また出なおしてくる。鉄の箱はどうしたつて手にいれるつもりだから、そのつもりでいろ。」

若ものは、そんなことをいつて、どこかへさつてしましました。

たちさつたと見せかけて、どこかにかくれているのではないかと、賢吉君はしばらく、ようすを見ていましたが、いつまでたつてもなにごともおこらず、ほんとうに帰つてしまつたらしいので、おずおずと木のかげから出て、たおれてゐる男に近づきました。男はまるで死んだようになつていましたが、賢吉君が顔をのぞいて、だきおこそようとすると、やつと目をひらいて、くるしそうな声を出しました。

「あ、きみか。おれはやられた。もうだめだ。箱をたのんだよ。おれが死んだら、川へす

ててくれ。それから、どうせ警察ざたになるだろうが、箱のことだけは、だまつてくれ。警察にも知られたくないんだ。きみのうちの人にもいつちやいけないよ。おれはなにも悪いことはしていない。きみにめいわくがかかるようなことは、けつしてないのだから。いいか、たのんだよ。」

それだけいうのが、せいいっぱいでした。男は、そのまま、また目をふさいで、ぐつたりとなつてしまいました。

賢吉君は、じぶんひとりではどうにもならないと思つたので、いきなりかけだして、神社の森をぬけ、近くのおうちへ帰つて、おとうさんに、今までのできごとをつたえました。鉄の箱はじぶんの勉強部屋の本箱のひきだしの中へかくし、おとうさんにも、そのことはいわなかつたのです。おとうさんは、警察へ電話をかけておいて、じぶんも、賢吉君のあんないで森の中へ行つてみることにしました。

窓の顔

賢吉君に鉄の小箱をあずけた五十男は、それから四一五日のちに、警察の病院で息をひ

きとりました。しらべてみると、この男は、船員あがりの宿なしで、家族もしんせきもない、ひとりぼっちの男とわかりましたので、警察の手で病院に入れて手あてをしたのですが、もともとからだが弱かつたので、とうとう死んでしまつたのでした。

さて、その男が死んだとなると、賢吉君は約束にしたがつて、鉄の小箱を川へすてなければならぬのですが、なにか大きな秘密がかくされているというその箱を、すててしまふ氣には、どうしてもなれません。そつとかくしておいて、じぶんでその秘密をさぐつてみたいのです。それで、約束にはそむくけれども、しばらくすてないで、かくしておくことにしました。

その箱は長さ十五センチ、はば九センチ、厚さ六センチほどの、から草もようの彫刻のある黒い鉄の箱で、どこにもわれめがなく、どうしてひらくのか、すこしもわかりません。中にはなにがはいつているのか、ふつてみてなんの音もしないのです。

賢吉君は、その中にとほうもない宝ものでもはいつているようで、いそいで箱をこわすのが、おいしいような気がしました。あとでゆつくりしらべることにして、どこかだれにも知られないような場所へ、かくさなければなりません。そこでいろいろ考えたすえ、庭のつき山の、てごろな石の下へかくすことにきめ、森の中の格闘のあつた夜、みんなが寝し

すまつたころ、そつと部屋の窓からぬけだして、おもちゃのシャベルで石の下をほつて、そこへ鉄の箱をうずめておいたのです。

男が病院で死んだという知らせをうけた晩にも、その石をあげてのぞいてみましたが、鉄の箱はちゃんとそこにありました。

しかし、賢吉君には、ひとつ心配なことがあつたのです。森の中の格闘のあとで、うちに帰つたときうわぎのポケットに入れておいたナイフが、なくなつていたのです。

えんぴつをけずる小さなナイフですが、あのとき木のかげにかくれていて、格闘を見ているあいだにおもわずそのナイフを手に握つていたのです。べつにそれで、ヨタモノをきずつけようというわけではなく、ただ、ひとりでに手がそこへいってナイフを握りしめていたのです。そのときは、もとのポケットに入れておいたつもりでしたが、あわてていたので、うつかりおとしてしまつたのかかもしれません。

そのナイフは、外がわにシカの角^{つの}がはりつけてあるのですが、わるいことには、そのシカの角の表面に、じぶんの名がローマ字で K · M I Y A T A と、ほりつけてありました。

もし、あのナイフを悪ものにひろわれたら、賢吉君が鉄の箱をかくしていることを、さとられるかもしれません。それで、あくる日、昼の間に森の中へいって、そのへんをくま

なくさがしたのですが、ナイフは、どこにもおちていませんでした。あのヨタモノが、あとからやつて来て、ひろつていつたのではないでしようか。賢吉君には、それがただひとつ的心配でした。

さて、男が病院で死んでから十五日ほどたつた、ある晩のことです。

賢吉君は勉強部屋の机にむかって、学校の宿題をやつていました。もう夜の九時ごろでした。その日も、夕方だれも見ていないのをたしかめて、つき山の石の下をのぞき、鉄の箱がちゃんととの場所にあることをたしかめておきました。そして、安心して、勉強していました。このぶんでは、ナイフをひろつたのは悪ものではなさそうです。あれから半月もたつのに、賢吉君の身辺に、なにごともおこらないのですから、もうだいじょうぶという気がしていました。

ところが、そうではなかつたのです。

宿題のむずかしいところにさしかかつたので、賢吉君はそれを考えるために、えんぴつをおいて目の前の空間を見つめっていました。すると、目の前になんだか、もやもやと動いているものがあるのです。おやつとおもつて、目をさだめてそこを見ました。

机のむこうに、ガラス窓があります。カーテンがひいてないので、そこからまつ暗な庭

が見えていました。そのまつ暗な中に、なにか黒いものがもやもやと、動いていました。やみの中に黒いものですから、よく見わけられませんが、なにかいることはたしかでした。人間かと思いましたが、人間ならば顔は白く見えるはずです。どうも人間ではなくうです。人間ではなくて人間ほどの大きさのものです。

ゾーッと、背中がさむくなりました。

その黒いものは、だんだんこちらへ近づいて来ます。もう窓ガラスのすぐそばまで来ました。ぼんやりとかたちが見えます。それは今まで一度も見たことのないような、うすきみのわるい、へんてこなものでした。

ギョツとして、心臓がのどのところまで、とびあがるような気がしました。

そのものが窓ガラスにぴったり顔をくつつけて、賢吉君をにらみつけたからです。

ひたいの下がゴリラのようにくぼんでいて、そのおくから、リンのように青白く光る、ふたつの目がのぞいていました。口は耳までさけて、そのくちびるのあいだから、二本の歯が、ニユーッと、のびていました。それは人間の顔ではありません。動物の顔でもありません。なんだかえたいのしれないものです。顔ぜんたいが、まるで鉄のように黒びかりに光っているのです。

賢吉君はにげだそうとしました。しかし、リンのように光る目でにらみつけられると、ちょうど、ヘビににらまれたカエルのように、もう身動きができなくなつて、いすにかけたまま、じつとしているほかはないのでした。

それから、もつとおそろしいことがおこりました。ガラス窓が、ジリジリと、下から上へひらきはじめたのです。怪物が外から、おしあげ窓をひらいているのです。

それでも、賢吉君は、まだにげる力がありません。まるで、いすにしばりつけられたように、まつたくからだが動かないのです。そして、目は怪物の方にひきつけられ、見まいとしても、その方からそらすことができないのです。

窓はすこしづつ、すこしづつ、上方へひらいていきました。そして四十センチほどひらいたとき、怪物の顔がニユーッと窓の中へはいって来ました。ふたつの目は青いほののようにもえています。頭の上には、氣味のわるいトサカのようなものが、するどくつつ立つっています。それから口が……。

その耳までさけた口が、キユーツと三日月形にひらいて、
「ジャ、ジャ、ジャ、ジャ、ジャ……。」

と笑つたのです。鉄と鉄がするるような、おそろしい音をたてて、笑つたのです。

怪物のゆくえ

賢吉君は、おもわず「ワーッ。」とさけんで、いすから立ちあがり、ドアの方へにげようとしましたがそのとき、頭がフラフラして、目の前がスーッと暗くなり、そのまま気をうしなつて、たおれてしましました。

「なんだか、いまへんな声がしたようだね。」

賢吉君のおとうさんが、おくの部屋から茶の間に出てきました。

「賢吉の部屋のようですわ。どうしたんでしょう。あなた、行つて見てくださいませんか

。」

おかあさんも心配そうな顔で立ちあがつっていました。

「行つてみよう。戸田君も、いつしょにきたまえ。」

おとうさんは、廊下にいた書生の戸田君をつれて、賢吉少年の勉強部屋にいそぎました。
「賢ちゃん、今、なにかいつたかい。」

ドアの外から声をかけてもなんの返事もありません。そして、部屋の中では、なにかゴ

トゴトと、みょうな音がしています。

「だれだつ、そこにいるのは?」

書生の戸田君が、どなつて、ドアをひらこうとしましたが、中からかぎがかけてあることがわかりました。

「へんですね。賢ちゃんは、めつたにかぎなんかかけたことがないのに。……おなじかぎが、もうひとつ茶の間にありましたね。ぼく取ってきます。」

戸田君は、そういうてかけだしていきましたが、すぐにひきかえしてきて、そのかぎでドアをひらきました。

そして、ひと目部屋の中を見ると、ふたりは、おもわず「あつ。」と、声をたてないではいられませんでした。

賢吉少年が、たおれているばかりではありません。本箱や机のひきだしが、ぜんぶひきぬかれて、その中のものが、部屋いっぱいにちらかっていたからです。

おとうさんは、賢吉君のそばにかけよつて抱きおこし、「賢ちゃん、賢ちゃん。」とよんで、そのからだをゆり動かしました。すると、賢吉君は、やつと気がついて、目をひらき、いきなりおとうさんのからだにしがみつきました。

「どうしたんだ。 いつたい、どうしたというんだ。」

おとうさんは、ちらばつた部屋の中や、ひらいた窓を見て、ふしんらしくたずねました。 賢吉君は、おとうさんにしがみついたまま、そつと部屋の中を見まわしましたが、さつきのおそろしいやつは、もう、どこにもいないことがわかりました。

「窓から、おばけが、はいつてきました。からだにウロコのはえた、牙のある、おそろしいやつです。ぼく、そいつに食われてしまふかと思つた。きっと、窓から出ていつたのです。まだ庭にいるかもしれない。」

賢吉君は、そういうつて、ガタガタふるえていました。

おとうさんは、そんな怪物がこの世にいるとは思いませんので、賢吉君がゆめかまぼろしでも見たのではないかと、うたがいましたが、それにしては、部屋の中がひつかきまわしたように、ちらかっているのがへんです。

おとうさんは、ひらいたガラス窓にかけよつて、まつ暗な庭を見まわしました。しかし、庭にはなにもいるようすがありません。

「おやつ。」

おとうさんは、そのとき、窓のしきいに、おそろしいかききずが、できているのに気が

つきました。それは大きな、するどい五本のツメで、ぐつとひつかいたような、なまなましいあとでした。

「おい、戸田君、このきずを見たまえ。なんだか動物のツメのあとのようじやないか。」

「そうですね。けさまで、こんなあとはついていませんでした。ひょつとしたら、ほんとうに、あやしいやつが、はいつてきたのかもしませんね。」

書生の戸田君も、顔色をかえていました。

「よし、庭へ出てみよう。足あとがあるだろう。きみ、懐中電灯をもつてきました。」

賢吉君は、さつきから、そこへようすを見にきていた、おかあさんにしがみついて、ふるえていました。おとうさんと戸田君は、部屋を出て、庭のほうへまわっていきました。

ふたりが庭において、懐中電灯でしらべてみますと、土のやわらかいところに、じつにぞつとするような怪物の足あとが、のこっていることがわかりました。それは、するどいツメのある巨大な動物の足あとしか、かんがえられないようなものでした。

こういう証拠を見ては、もう、ほうつておくわけにはいきません。おとうさんは、すぐに警察へ電話をかけて、ことのしだいを知らせました。

その電話をきいて、警察でもへんだとと思いましたが、賢吉君のおとうさんは、大きな会

社の重役をつとめている、町でも有名な実業家でしたから、まさかでたらめではあるまいと、とりあえず三人の警官が自動車をとばして賢吉君のうちへやつてきました。そして、うちの中と庭とを、くまなくしらべましたが、窓のツメのあとと、庭の足あととのほかには、なにも発見できませんでした。

それでは、うちの外まわりを、しらべてみようというので、三人の警官がへいの外の、暗い町を歩いていますと、むこうのほうから、おそろしいいきおいで、かけて来る男の姿が見えました。なにものかに追いかけられているように、いちもくさんにくわんに走つてくるのです。

「きみ、どうしたんだ。」

ふしんに思つて声をかけると、その男は三人の前で立ちどまりました。

「あ、おまわりさんですね。たいへんです。おそろしいやつが、マンホールの中から、出てきたのです。」

息をきつて、またにげだしそうにしています。どこか近くの店の店員らしく、ジヤンパーを着た若い男です。

「きみはいつたい、なにを見たんだ。」

「ばけものです。」

それをきくと警官たちは、この男は、もしや賢吉君をおそつた怪物にあつたのではな
いかと思い、あわててたずねました。

「そのマンホールっていうのは、どこだ。」

「あそこです。この町のかどをまがったところです。」

警官たちはそこまできくと、よしつとさけんで、いきなりその町がどへかけだしました。
かどをまがると、すぐにマンホールが見えました。しかし、べつにあやしいものも見あ
たりません。マンホールには、ちゃんと鉄のふたがしまっています。

「おい、このマンホールかい。なにもいやしないじやないか。」

おずおずついてきた若ものに、たずねますと、さもこわそうにゆびさしながら、
「それです。そのふたがスー^ツともちあがつて、中からおそろしいばけものが出てきたの
です。」

「おそろしいばけものって、どんなやつだつた？」

「牙がはえていました。それからウロコがはえていました。目がリンのように光つていま
した。」

やつぱりそうでした。賢吉君をおそつた怪物です。

「そいつは、マンホールから出たのでなくて、マンホールへにげこんだのかかもしれないぞ。

」

警官のひとりが、さすがに気味わるそうに、目の前のマンホールのふたを見ました。
「よし、それじや、しらべてみよう。手をかしたまえ、そして、きみはピストルを出して
かまえていてくれ。危険と見たらぶつぱなすんだ。」

三人の中でせんぱいらしい警官が、そういうつて懐中電灯をつけると、マンホールのふた
のそばにしゃがみこみました。もうひとりの警官が、それに手をかします。のこるひとり
は、腰のサックからピストルをぬきだして、いざといえれば、発射する身がまえをしました。
「そら、いいか。」

ふたりの警官が力をあわせて、マンホールの鉄のふたをひらいて、わきにのけました。
穴の中は、まつ暗です。懐中電灯の光が、さつとそこをてらしました。

その中に、鉄のウロコの怪物が、うずくまつていたのでしょうか。いや、そうではあり
ません。中はからつぽだつたのです。警官たちは、ひょうしぬけしてしまいました。
「なんだ。なんにもいじやないか。」

それは下水のマンホールでしたが、ほそい下水道ですから、そこから下水をつたつてにげることはとてもできません。

怪物は、いちじマンホールの中へかくれて、それからまた、にげだしたのでしよう。さつき店員の見たのは、やつぱり、出てくるところだつたのでしよう。

この店員は賢吉君とおなじ怪物を見たのです。ふたりも見た人があるからには、もう、ゆめやまぼろしとはいえません。すべてはおけないので。そこで、警官は電話でこのことを本署にしらせ、本署から警視庁にれんらくしました。

それからは、たいへんなさわぎです。パトロールカーが三台もやつてきました。警視庁や警察署から何台も自動車がきました。それに新聞記者です。賢吉君のおうちは、りんじの捜査本部になつて、門の前には十何台の自動車がならび、近所の人たちが、なにごとかと集まつてくるのですから、たちまち黒山の人だかりです。

何十人という警官による大捜索がはじまりました。その近くの家という家は、かたつぱしからしらべられ、町という町は警察の自動車が巡回し、非常線がはられ、アリのはいだすすきまもない、捜査のあみがはられました。

しかし、あくる朝になつても、どこからも、あやしいものは発見されませんでした。鉄

の人魚は、煙のようになじみでしまつたのです。

そのよく日の新聞は、鉄のウロコの怪人の記事でいっぱいでした。賢吉君のうちの窓じきいにのこつたツメのあとと、庭の大きな動物の足あとが、写真になつて新聞にのつたのです。日本全国の人がその新聞をよんで、ふるえあがつてしまつました。そして、人が集まれば、このおそろしい怪物の話でもちきりでした。

大金塊

賢吉少年は、そのあくる朝、警察の人たちがひきあげていくのをまつて、そつと庭へ出ました。庭の石の下にかくしておいた、あの小さい鉄の箱をしらべてみるためです。ゆうべの怪物が、鉄の箱を持つていつたのではないかと心配でたまらなかつたのです。

目じるしの石をもちあげてみますと、ああよかつた。鉄の箱は、そこにありました。ちゃんと、もとの場所にのこつていたのです。賢吉君は、もうじぶんひとりで、かくしておいてはいけないと思いました。それで箱をとりだすと、いそいでうちにかけこみ、それをおとうさんに見せて、このあいだの夜、神社の森の中で格闘があつたとき、顔じゆうにヒ

ゲのはえた、きたないおじさんに、この箱をあずけられたこと、そのおじさんは、もしおれが死んだら、鉄の箱を、川の中へすててくれといつたけれども、おじさんが警察病院で死んでからも、する気になないので、庭の石の下へうずめておいたことを、くわしく話しました。

おとうさんは、鉄の箱を手にとつてひらこうとしましたが、どうしてもあけることができません。書生の戸田君もやつてみましたが、やっぱりダメです。

そのとき、賢吉少年は、ふと思いついたように、声をはずませていいました。

「いいことがあります。ぼく、その箱を明智探偵事務所へ持つていって、ぼくらの少年探偵団の小林団長に見せましょう。そして、明智先生の知恵をかりれば、きっとこの箱の秘密がわかりますよ。」

「うん、それはいい思いつきだ。戸田君に送つてもらつて、いつもよびつけのハイヤーに乗つて行つてくるがいい。運転手と戸田君と、ふたりも『えいがついてれば、だいじょうぶだらう。それに昼間のことだしね。』

おとうさんも賛成だつたので、まず明智の事務所へ電話をかけますと、明智先生も小林少年も、事務所にいることがわかりましたので、顔見知りの運転手の自動車をよんと、賢

吉少年は鉄の箱をだいじにかかえて、書生の戸田君といっしょに、それに乗りこみました。事務所につくと、小林少年が出てきて、ふたりを応接室にとおしました。そして、賢吉君から話をきき、鉄の箱を手にとつて、いろいろやつてみましたが、小林少年にもひらくことができません。

「ちよつと待つっていたまえ。明智先生に、この箱を見せてくるから。」

小林少年はそういうて、箱を持つてドアの外へ出ていきましたが、十分ほどすると、明智先生といっしょに、にこにこしてどつてきました。

「先生は、わけなくおひらきになつたよ。ほら、こうするんだ。はこねざいく箱根細工の秘密箱とおなじだよ。から草もようの、こここのところをおすんだよ。すると、こちらがわがひらくようになる。それから、ここをおすと、ね。二一三度、おなじことを、くりかえせばいいんだよ。そうすると、すつかり、ひらいてしまう。

だが、それよりも、もつとたいへんなことがあるんだ。この箱の中には、何十億円というすばらしいねうちのものが、はいつていたのだよ。」

小林少年の説明にびっくりしていると、明智探偵がいすにかけて、にこにこしながら話しあはじめました。

「それはこういうわけだよ。この鉄の箱の中には、三つの書きものがふうじこめてあつた。ひとつは福永^{ふくなが}という、もと遠洋航路の大洋丸の船長をしていた人の遺言書。ひとつは、紀伊半島の南の海路図。もうひとつは保険会社の証書なのだよ。」

明智はそういつて、手に持つていた何枚かの書きつけを見せました。

「その、もと船長の遺言書は、むずかしい文章なので、くだいて話すとね、今から二十年ばかりまえに、紀伊半島の潮ノ岬^{しおみさき}の沖で、大洋丸という汽船が、暴風のために沈没した。そのときは、何十年に一度というひどいあらしで、大洋丸が無電で助けをもとめても、海岸から助けの船を出すこともできなかつたほどで、多くの船客や乗組員が死んでしまつた。流れたボートにすがつて、やつと海岸にたどりついたのは、十数人の乗組員だけで、その中に、船長の福永^{ふくなが}という人もはいっていた。じぶんだけ助かるというのは、あまりえらい船長じやないね。」

大洋丸が無電で助けをもとめるとき、今どこにいるかという位置を知らせたのはいうまでもないが、福永船長の遺言書には、そのとき、じぶんはあわてていたので、たいへんなまちがいをしたと書いてある。経度^{けいど}の数字をまちがえて無電技師につたえたので、あとで大洋丸がまるでけんとうちがいの場所に沈んだようになつてしまつて、保険会社が、船会

社に保険金をはらつたあとで、沈んだ場所をしらべると、そこはひじょうに深いところで、船はもちろん、荷物も引きあげられないことがわかつて、あきらめてしまった。

福永船長は、それから一年ほどたつて、やつと無電で送つた沈没の位置がちがつていたことに気づいたというのだが、これはどうもおかしいね。船長は、わざと気づかないことにしておいたのかもしれない。そして、それからまた一年ほどたつて、船長は、保険会社から沈没した大洋丸の権利を買いとつた。そのころのお金で、二十何万円、今にすれば一億円ぐらいになるがね。そのお金をこしらえて、沈没船をじぶんのものにしてしまつた。どうせ引きあげられない船だから、保険会社もやすく売つてしまつたのだね。

引きあげの見こみもない船に、どうしてそんな大金を出したかというと、その船には、
香港ホンコンからアメリカに送る金塊がたくさんつんであつたのだ。遺言書には、そのころのねうちで四百万円とあるから、今では二十億円ほどのものだ。船長は、それを引きあげて、大金持ちになろうとしたのだよ。保険会社から権利が買つてあるので、だれにもえんりよすることはないのだ。

保険会社は、世界じゅうのどんな潜水技術でも、どうしても引きあげられない深いところにあると思ったので、権利を売つたのだが、船長は大洋丸が、無電で知らせた場所から

は五マイルもへだたつた、もつとあさいところに沈んでいることを、ちゃんと知っていた。そこなら潜水作業もできるだろうと考えたのだよ。

そこでいよいよサルベージ会社にたのんで、金塊の引きあげをやろうと、いろいろな準備をしているうちに、この福永船長は たいびょう 大病にかかって、なにもできないようになり、三ヵ月ほどで死んでしまった。天罰があたつたのだろうね。それで、まだ字のかけるあいだに、この遺言書を書いて、鉄の秘密箱をつくりさせて、保険会社の証書と、ほんとうに大洋丸の沈んでいる場所をしるした海図といつしょにふうじこんで、じぶんのひとりむすこにのこした。

そのむすこが、賢吉君に鉄の箱をあずけたというわけだ。このむすこは、いくじのない男で、じぶんで引きあげて作業をはじめるこどもできず、いく人かのお金持ちに、引きあげの権利を売りつけようとしたが、そのころは、もうびんぼうになつてしまつて、きたないふうをしていたので、そんな男の『海底の大金塊』なんて、ゆめみたいな話は、だれも信用してくれなかつたのだね。そして、いつのまにか二十年がたつてしまつた。そのことが、むすこの手で遺言書のはじに書きつけてあるのだよ。』

明智探偵の長い説明が、やつとおわりました。賢吉少年には、まだよくわからないどこ

ろもありましたが、ともかく、二十億円の金塊が、潮ノ岬の沖に沈んだままになつてゐることは、なんだか、ほんとうらしく思われてくるのでした。

白昼の怪物

明智探偵は、そういう説明をしたあとで、賢吉少年と書生の戸田に、こんなことをいいました。

「この小箱をねらつてゐるやつは、おそろしい悪ものだ。賢吉君のおうちへおくのは、心配なくらいだ。しかし、それは、わたしが、まもつてあげる。だいじょうぶだから、安心してお帰りなさい。そして、またもとの石の下へかくしておくんだね。」

そういうて、部屋のすみの、事務机の前にいつて、小箱の中へ書きつけを入れ、もとのとおりふたをしめて、賢吉君に手わたしました。

賢吉君と書生の戸田は、明智探偵と小林少年に、あつくおれいをいつて、いとまをつけ、おもてに待つていた自動車に乗りました。

自動車は世田谷の賢吉君のおうちに向かつて走りだし、十五分ほどすると、大きなやし

きのならんださびしい道にさしかかりました。両がわに、高いコンクリートのへいが百メートルもつづいて、そのへいの中には、大きな木がたちならび、ひるまでも、うす暗いようなところです。

そのコンクリートべいの谷間のような場所にきたとき、自動車がキーツというブレーキの音をたててとまりました。

「おや、へんなところで、とめるじゃないか。どうしたんだ。故障がおこつたのかい。」

書生の戸田が、運転手に声をかけました。すると、むこうをむいていた運転手が、ひよいと、こちらをふりむいて、ニヤリと笑つたのです。

「あつ、きみはさつきの運転手とちがうじやないか。いつのまに、いれかわつたんだ。そして、きみはいつたい、だれだつ！」

「こりういうもんさ。」

運転手はふてぶてしい声で答えて、ニユーッと、ピストルをさしつけました。

「あつ、それじや、きさまは……。」

戸田はびつくりして、となりの賢吉少年をだくよにして、まもりました。あいてがピストルを持っているのでは、どうすることもできません。

「なあに、きみたちの命をもらおうとはいわない。鉄の小箱さえだせばいいのだ。さあ、はやくだせ。」

戸田は、すきがあれば、自動車からとびおりて、にげようと、そつとドアのとつてに、ゆびをかけました。

すると、あいては、はやくもそれをさつして、にくにくしく笑うのでした。

「ハハハ……ダメダメ、にげようたつて、にげられるものじやない。ドアの外をよく見るのがいい。」

はつとして、ガラス窓の外を見ますと、いつのまにあらわれたのか、窓のすぐそばに、ものすごい顔の男が立ちはだかつていきました。手には、やつぱりピストルをかまえて、にやにや笑つているのです。それじや、こちらからと、はんたいがわの窓を見れば、これはどうでしよう。そこにも、おなじようなあらくれ男が、ピストルをかまえて、にらみつけているではありませんか。

三方からピストルを向けられては、もう、どうすることもできません。戸田は賢吉少年に、鉄の小箱をわたすように手まねであいざをしました。賢吉君も、しかたがないので、それを、前の運転手にさしだしました。

あいては、ひつたくるように、それをうけとると、また、にくにくしく笑うのでした。

「ワハハハ……、かんしん、かんしん、きみたちは、よくいうことをきくねえ。それじゃ、これでゆるしてやるよ。きみたちの運転手は、うしろのトランクにおしこめてある。おれたちの姿が見えなくなつたら、トランクをあけて、だしてやるがいい。そうすれば、また自動車を運転してくれるよ。」

にせ運転手は、自動車からとびだして、パタンとドアをしめました。そして、三人の男は、まるで短距離の選手のように、おそろしいきおいで、むこうへ、かけだしていきました。

「ああ、とりかえしのつかないことをしてしまつた。あのだいじな鉄の小箱をとられてしまつた。賢ちゃん、あいつらは、いつかの悪ものの手下ですよ。……それにしても、明智さんは、ぼくがまもつてやるから、だいじょうぶだとうけあつてくれたのに、どうしたといふんでしょう。こんなに、はやく、とられてしまうようでは、明智さんも、あてになりませんね。じつに、ざんねんです。」

戸田は、くやしそうに、ぶつぶつついていましたが、三人の男の姿が、見えなくなつてしまふと、自動車をおりて、うしろのトランクのふたをひらきました。そこには、

あの知りあいの運転手が、さるぐつわをはめられて、まるくなつて、おしごめられていました。

賢吉君も車をおりて、てつだいました。そして、トランクからだして、さるぐつわをはずしてやりましたが、運転手は、頭をさすりながら、

「明智さんの事務所の前に、車をとめてうつかりしていると、いきなり、うしろから、ここをガンとやられ、さるぐつわをはめられてしまいました。おそらく力のつよいやつで、どうすることもできませんでした。もうしわけありません。それじや、やつがわたしにかけて、ここまで運転してきたのですね。」

「そうだよ。きみとおなじような上着をきていたので、うしろ姿では、見わけがつかなかつた。まさか、ひるまから、こんなだいたんなまねをするとは思いもよらないのでね。さあ、いそいで運転してくれ。もううちに近いんだから、帰つてから警察に電話をかけよう。ぼくらは、だいじなものを、ぬすまれてしまつたんだよ。」

そこで、三人は自動車に乗りこみましたが、車が走りだそうとするとき、賢吉少年が、「あつ。」と声をたてました。まつさおな顔になつて、目がとびだすほど大きくなつています。そして、窓の外をじつと見つめているのです。

戸田と運転手は、おどろいて、賢吉君の見つめているところを見ました。

高いコンクリートべいの上から、なにかがのぞいていました。うしろには、大きな木の枝が青黒くしげっています。その前のへいの頂上に、なにか黒いものが見えるのです。

それは、えたいのしれぬ、へんてこなものでした。黒い顔の中に、リンのように青く光るふたつの目がありました。耳までさけた口がありました。その口から、ニユーッと白い牙がつきだしているのです。頭には、するどい鉄のトサカがはえています。

鉄の人魚です。あの怪物が、コンクリートべいの内がわをよじのぼつて、首だけだして、こちらにらみつけているのです。

「はやく、はやく……。」賢吉君は、一度出あつたことがあるので、そのおそろしさを、よく知つていました。いまにも、怪物がへいをのりこして、追つかけてでもくるように、運転手をせきたてるのでした。

運転手も、このおそろしい怪物には、すっかり、おびえてしまつて、やにわに速力をだしました。車は人通りのない谷間の町を、きちがいのように突進しました。

ハヤブサ丸

賢吉少年たちは、うちに帰ると、自動車をとびおりて、おとうさんの部屋へかけこんでいきました。そして、息をはずませて、いまのできごとを伝えるのでした。

おとうさんは、すぐに警察へ電話をかけて、このことをしらせ、それから明智探偵事務所をよびだしました。

「なに、鉄の小箱をとられた？ やつぱりそうでしたか。」

電話口の明智探偵は、そういうて、ちょっと、考えているようでしたが、すぐに、ことばをつづけました。

「それじや、これからすぐに、おたくへうかがいます。電話ではお話しできることがあるのです。しかし、ご安心ください。わたしは賢吉君に、かならず、まもつてあげると、約束しました。その約束はちゃんとまもつてているのです。」

そして、電話がきたのですが、明智探偵は、いつたい、なにをいつているのでしょうか。鉄の小箱をまもるという約束だつたではありますんか。その小箱はとつぐに盗まれてしまつたのです。いまごろになつて、どうしようというのでしょうか。おとうさんは、ふしぎそくに首をかしげました。

しばらくすると、明智探偵が、自動車でかけつけてきました。おとうさんと賢吉君は、明智を応接間にとおしてもてなしました。

「さつきの電話は、よくわからなかつたのですが、鉄の小箱はあくまでまもつてやると、おつしやつたようですね。」

おとうさんが明智をせめるように、たずねました。

「そうです。たしかにおまもりしています。」

名探偵は、にこにこして答えました。

「え、それは、いつたい、どういうわけですか。鉄の小箱は、惡ものにとられてしまつたのですよ。」

「いや、ご心配にはおよびません。とられたのは、箱だけです。なかみは、ちゃんとここにありますよ。」

明智はポケットから、大きな封筒をとりだして、その中から、船長の遺言書と、航海図と、保険会社の証書をだして見せました。

「あつ、それじや、先生は……。」

「そうですよ。こんなこともあろうかと思つて、小箱のなかみを、すりかえておいたので

す。悪ものが盗んでいった鉄の小箱には、白い紙がはいつているばかりですよ。」

賢吉君もおとうさんも、名探偵のぬけめのないやりくちに、すっかり感心していました。

「ああ、そうとは知らないものですから、しつれいなことを、もうしました。おゆるしください。さすがは明智先生です。これですっかり安心しました。」

おとうさんは、くりかえし、おれいをいうのでした。明智は、ことばをあらためて、

「宮田さん、悪ものどもは、このうえ、まだどんなたくらみをするかわかりません。金塊を、はやくこちらで引きあげることにしてはどうでしよう。遺言書に書いてあることは、うそではありますまい。わたしは、さつき賢吉君が帰られてから、しらべてみたのですが、いまから二十年まえに潮ノ岬の沖で、東洋汽船会社の大洋丸が、沈没したことは、たしかです。また、そのとき、引きあげ作業をやろうとして、できなかつたことも、まちがいありません。

やつてみるだけのねうちはあります。東洋汽船会社と保険会社に相談して、費用をだしてもらつて、もし金塊が見つかつたら、あなたと、汽船会社と、保険会社でわけるということにして、政府にもことわつて、海の底を、さぐつて見られてはどうでしよう。」

賢吉君のおとうさんは、しばらく考えていましたが、やがて、決心したようにいうので

した。

「それじや、ひとつ海底の冒険をやつてみましょうか。さいわい、この汽船会社と保険会社の重役に友人がおりますし、沈没船ひきあげのサルベージ会社にも、したしい人がありますから、わたしが相談すれば、きっと承知してくれます。

じつは、わたしは、こういう冒険がだいすきなのですよ。」

それから、いろいろ、金塊ひきあげのことについて話しあつて、いるところへ、電話がかかつてきました。おとうさんが立つて、いつて、受話器を耳にあてますと、なんだか、みよう音が聞こえてきました。ジャ、ジャ、ジャ、ジャという鉄をこすりあわせて、いるような、気味のわるい音です。電話の故障かと思いましたが、そうではありません。なにかいつて、いるのです。

「ゾコニ、アケチガイルダロ。ハナシタイコトガアル、ヨンデクレ。」

それは人間の声とは、思えないような、ぶきみな音でした。

「あなたは、だれですか。」

「アケチノ、トモダチダ、ハヤク、ヨンデクレ。」

しかたがないので、明智をよんで、受話器をわたしました。

「ぼくは明智だが、きみはどなたです。」

「シツテルダロ、オマエノテキダ。ヨクモテツノハコノナカノモノヲ、カクシタナ。オボエテイロ、キット、トリカエシテヤルゾ。アケチ、オボエテイロ。」

そしてガチャーンと電話がきました。明智は賢吉君のおとうさんと、顔を見あわせました。

「鉄の人魚です。やつぱり、あいつが、大金塊をねらつているのです。ゆだんはなりません。いつこくもはやく引きあげ作業をしなければなりません。」

それから二週間ほどは、なにごともなくすぎさりました。そして、ある日のこと、日東サルベージ会社のハヤブサ丸が、大阪港から潮ノ岬にむかつて出発したのです。

ハヤブサ丸は、六百トンの引きあげ作業船です。この船には、サルベージ会社の技師や潜水夫や船員のほかに、賢吉君と、おとうさんの宮田さんと、小林少年が乗りこんでいました。東京から大阪まで電車できて、この船に乗ったのです。小林君は明智探偵の代理として同行しました。そしてもし、むずかしいことがおこつたら、無電で明智先生にしらせるという約束でした。

ときは春、空は青々とはれて、畠^{たたみ}のように静かな海を、ハヤブサ丸はすべるようになります

んでいます。たのしい航海でした。小林少年と賢吉少年は、^{じょうかんばん}上甲板に出て、船尾にあわだつ白い波を見ながら、かたをくんで、たからかに歌をうたいました。

その夜は、美しい月夜でした。夜がふけるにつれて、ますます月はさえかえり、波にそのかげをうつして、海はいちめんに銀ぱくをまきちらしたようです。

こうたいでもち場についている船員のほかは、みんな船室にはいって、ねむりについていました。トントントントンという機関のひびき、サーツ、サーツと船が波をきる音、こうこうと照る月の下には、そのほかに、なんのもの音もありませんでした。

ひとりの船員が、甲板をコツコツと、歩いていました。一時間ごとの見まわりです。中央船室のよこの、ほそい通路をとおつて、船首のほうにでました。つりあげた救命ボートの下をくぐつて、ひよいと、むこうを見ると、船首のとっぱなに、黒いものが、うずくまつっていました。

「おやつ、あんなところに、だれかが寝ているのかしら。」へんだとと思って、そのほうへ近づいていきましたが、どうも人間ではなさそうです。からだじゅうに大きなウロコが、はえています。それが月の光をうけて、キラキラとひかっているのです。長いしつぽがあります。頭から、背中にかけて、ギザギザのトサカのようなものが、つづいています。な

んだか大きなワニのようでした。しかし、このへんにワニがすんでいるはずはありません。船員は、背中がゾーツと、さむくなつてきました。どんな動物の本にも書いてないような、へんに気味のわるいものです。でも、こわいもの見たさで、足音をぬすむようにして、なおも近づいていきますと、その黒いやつが、首をあげて、ぐーっと、こちらをむきました。

それを、一目見ると、船員は、からだがしごれたようになつて、にげることも、さけぶことも、できなくなつてしましました。

黒い鉄のような大きな顔に、くぼんだ目が、リンのようにかがやいていました。耳までさけた三日月がたの口から、白い牙がニユーツと、つきだしていました。

「ジャ、ジャ、ジャ、ジャ、ジャ……。」

怪物が口を大きくひらいて、笑つてているのです。その笑い声は、まるで鉄をすりあわせるような、氣味のわるい音でした。

「ワーッ。」

とうとう、声がでました。船員は、死にものぐるいの声をふりしぼつて、助けをもとめました。

「だれかきてくれ……。」

その声に、どこからか、人の走る音がして、ひとり、ふたり、三人と、船員が、かけつけてきました。

船首の怪物は、ひときわ大きな声で笑いながら、さつと、身をひるがえすと、ウロコをキラキラひからせながら、ふなばたの手すりをこして、ドボーンと海の中へ、とびこんでしまいました。

いそいで、ふなばたにかけよつて、のぞいて見ると、鉄のワニのようなやつが、船とならんで泳いでいましたが、あつと思うまに水中ふかく沈んで、海面から姿を消していきました。

鉄の人魚です。鉄の小箱の海図をぬすむことができなかつたので、ひそかに賢吉君らのあとを追い、この船まで、つけてきたのでしょうか。海中にとびこんだといつても、あいつは、もともと海の怪物です。船とおなじはやさで、泳いでいるのかもしれません。そして、どこまでも、しゅうねんぶかく、賢吉君たちのあとを追つてくるのかもしれません。

船室のがい骨

小林少年は、このできごとを、無電で東京の警視庁に知らせ、そこから明智探偵事務所へ伝えてもらいました。

それからは、べつだんのできごともなく、ハヤブサ丸は潮ノ岬の沖につきました。宮田さんの手にいれた海図には、大洋丸の沈んだ位置の緯度と経度が、ちゃんとしるしてありますから、その位置の海底を、水中探測機でさぐればよいのです。

水中探測機というのは、船から超短波を発して、それが海底にぶつかって、もどつてくる時間がグラフになつて、紙のうえにあらわれるようになつてゐる機械です。そのグラフの曲線で、海の深さがわかるのですが、もし沈没船があれば、そこだけ、きゆうにふくらんだ線になつてあらわれるので、それとさつしがつくわけです。

ハヤブサ丸は、海図にしてある海面を、行つたり来たりして、くりかえし水中探測機のグラフをしらべました。そして、その曲線のふくらみが、海底の岩やなんかでなくて、沈没船にちがいないことをたしかめたのです。

海面から沈没船の上部までは、わずかに三十メートルほどでした。これなら、金塊だけでなく、大洋丸そのものも、引きあげができるかもしません。大洋丸の船長が、

正しい沈没の位置をかくして いたばかりに、貴重な金塊や鉄材が、二十年も海底にねむつていたのです。

沈没船の位置がわかると、いよいよ、潜水夫をもぐらせてみることになりました。金塊が、大洋丸のどこにつんであつたかは、船長の遺言書にも書いてありませんので、それをさがすだけでも、たいへんです。ですから、すぐに金塊を引きあげるわけではなく、まずその沈没船が、はたして大洋丸がどうかを、しらべるための潜水です。

その日は、空が青々とはれわたつた、よい天気で、風もなく、波もなく、潜水にはもつてこいの日よりでした。

サルベージ会社の人たちは、ふたりのくつきような潜水夫を、えらび出して、ゴムの潛水服をさせ、しんちゅう真鑑の潜水カブトをかぶせてやり、カブトの中へ空気をおくる、送気工ンジンのよういをしました。

ふたりの潜水夫は、ハヤブサ丸の外がわにとりつけてある、直立の鉄ばしごをおりて、タコのおばけのような丸い頭をふりながら、いのち綱とゴムホースのような送気管と、それによきついている電話線を引きずるようにして、つめたい水の中へ、はいつていきました。

船の上では、船長や汽船会社の人たちや、この引きあげ作業の団長である宮田さんなどにまじって、賢吉少年と、小林少年とが、海中に異様な姿を沈めていく潜水夫たちを、じつと、見まもつていました。

ふたりの潜水夫は、右手には、なにかをこじあけるための鉄棒のようなものを持ち、左手には、暗い沈没船の中をてらすための、水中電灯をさげていました。

潜水夫たちは、足のうらにつけた、大きなナマリのおもりや、胸にさげたナマリのおもりの力で、ぐんぐん水の中を沈んでいきます。沈むにつれて、下の方から巨大な船体が見えてきました。二十年もたつているので、水の中のゴミがつもり、そこから巨大な船体が見えました。また貝がらが、いっぱいいていて、鉄の船というよりは、海の底の大きな岩山のように見えるのでした。船体は三十度ぐらいによこにかしいで沈んでいました。甲板がきゆうな坂のように、かたむいているのです。ふたりの潜水夫がおりたのは、沈没船の船首に近いところでした。かれらは船首の外がわにたどりついて鉄棒で貝がらなどを、けずりとり、水中電灯をふりてらして、船の名が書いてある場所をさがしました。そして、なんなく、それが大洋丸にちがいないことを、たしかめたのでした。

それから、ふたりは、かたむいた甲板をよじのぼるようにして、ハツチ（甲板から船の

中へおりる出入り口）をさがしました。それも、じき見つかつたので、ふたりはそこから、せまい階段をおりて、下の船室へはいつていきました。その鉄の階段にも、いちめんに、貝がらがくつついているので、まるで岩のほら穴の中へでも、はいついくようなかんじです。

階段をおりたところに、広い部屋がありました。いや、部屋というよりは、大きなほら穴です。かたむいた床には、二十年のゴミがたまり、そこから人間の胸までもあるような、長いコンブのような海草が、いっぱいはえていて、歩くこともできないほどです。

そこは上甲板の下で、貴重品室などのあるところですから、潜水夫たちは、それをさがすために、おりてきたのですが、壁は、すっかり貝がらにおおわれていて、どこにドアがあるかもわからないほどで、とても、金塊のありかをみつけだす見こみはありません。

船室の床も、三十度かたむいているのですから、ナマリのくつで歩くたびに、ずるずるとすべります。しかし、陸上とちがつて、すべつても、ころぶようなことはありません。水の中でからだが軽くなっているからです。

足がすべると、海草の根に十センチもたまつていいるゴミが、むらむらと目の前にわきあがり、むこうが、見えなくなってしまいます。また、海草のあいだに、かくれていたさか

なが、むれをなして逃げだします。それが水中電灯の光の中をとおると、ウロコが金色、銀色にかがやいて、じつにうつくしいのです。

潜水夫は、手くびまではゴムの潜水服ですが、ゆびには軍手をはめていました。そのほうが仕事がしやすいからです。ひとりの潜水夫が、かたむいた床にすべて、どろどろしたゴミのなかに手をつきました。すると、その手に、なにかみような、かたいものがさわりました。

「おい、ほとけさまだぜ。」

陸上ならば、そういうつて、なかまにしらせるのですが、潜水服では、おたがいに話もできません。水中電灯を、二一三度、よこにふつて、こちらを見よというあいだをしました。そして、ゴミの中のかたいものを、ひろいあげ、電灯の前に持ちあげました。

それはがい骨の頭でした。黒いほら穴のような目、くいしばつた長い歯のれつ、潜水夫は、沈没船のがい骨には、なれていたのですが、やつぱり、ぶきみです。すると、もうひとりの潜水夫が、電灯の光の前に手を出しました。その手は、がい骨の足の骨を、にぎつていたではありませんか。

それから、水中電灯を、床のゴミのそばに近づけて、さがしてみると、手や足や、あば

らの骨が、つぎつぎと、あらわれてきました。大洋丸の船員が、この部屋で死んでいたのです。それが、いまではバラバラの骨ばかりになつて残つていたのです。

怪物！　怪物！

ふたりの潜水夫は、がい骨を見て、氣味わるくおもいましたが、こわがるというほどではありませんでした。かれらは力の強いくつきようの若もので、ちよつとぐらいのことには、おどろくような弱虫ではなかつたのです。

ところが、その勇敢な潜水夫が、あまりのおそろしさに、ガタガタふるえだすようなどが、おこりました。

ふたりが、がい骨をつけたあとで、なおもおく深く進もうとしていますと、水中電灯の光が、かすかにてらしている、むこうの方の海草が、ゆらゆらと動いているのに気づきました。さつきからふたりが歩くたびに、そのまわりの海草が、ゆれ動いてはいましたが、そんな遠くの方の海草が、動くのはへんです。なにか大きなさかなでもかくれてしているのではないでしょうか。そのへんの海には、ずいぶん大きなさかながいます。また、びっくり

するような巨大なカニなども、すんでいるのです。ふたりは、海草のうしろから、なにがとびだしてくるのかと、おもしろはんぶんに、水中電灯をてらしながらその方へ近づいていきました。

見ると、ゆらゆらゆれている、コンブのような海草のあいだから、ニユーッと、黒っぽいものが出てきました。カニの足かもしません。それでも、おそろしく大きなふとい足です。

その黒っぽい足のようなものは、さきがいくつにもわかれ、キューッとまがつてしました。そのひとつひとつに、するどいツメのようなものがついています。まるで人間のゆびのようです。しかし、こんな黒い人間のゆびがあるでしようか。

潜水夫たちは、そこに立ちすくんでしました。なんだか、こわくなつてきたからです。

その黒いうでが、ぐ一つとのびて、黒い肩があらわれ、それから、顔のようなものが、ひよいとのぞきました。

それを見ると、こちらは、潜水カブトの中で、「あつ。」と声をたてました。

リンのように、まっさおに光つている、大きな二つの目、耳までさけた、おそろしい口、

その口から白い歯が二本、ニユーツとつき出しています。そして、鉄のような黒い頭の上には、するどくとんがつた、トサカのようなギザギザがあるのです。

潜水夫たちは、まだ鉄の人魚を見てはいなのです。しかし、そいつがハヤブサ丸の甲板に寝そべつていたという話はきいていました。こいつこそ、その鉄の人魚にちがいありません。やつぱり、怪物はハヤブサ丸のあとをつけて、潮ノ岬までやつてきたのです。そして、はやくも大洋丸の船室の中へはいりこんでいたのです。

潜水夫たちが、ふるえあがつて逃げだそうとしていますと、怪物は、もう全身をあらわして、パツとこちらへとびかかってきました。ああ、そのおそろしさ！ それは映画のなかで、機関車がばくしんしてくるのにっていました。

青く光る二つの目が、白い歯が、水の中を、とびつくように、ばくしんしてきたのです。

「人魚だあ！ 鉄の人魚だあ！ 引きあげてくれえ、はやく、引きあげてくれえ！」

潜水夫たちは、カブトの中で、声をかぎりにさけびました。その声は、むろん、電話線でハヤブサ丸の上につうじるのです。

そして、もがくようにして、船室から逃げだそうとしました。怪物は、そのうしろから、おそろしい手をのばして、せまつてきます。

逃げおくれた、ひとりの潜水夫は、あつというまに足をつかまれました。するどい五本のツメが、ぐつと潜水服に、くいこんだのです。

もう死にものぐるいでした。右手の鉄棒をふりあげて、めちゃくちやに、怪物をたたきつけ、もがきにもがいて、やつと足をはなしました。

そして、ふたりとも、船室からハツチへと浮きあがることが、できたのです。怪物はなげか、そこまでは追いかけてきませんでした。

魚形潜航艇

潜水夫たちがハヤブサ丸にかえつて、怪物のことを報告しますと、船の中は、大きわぎになりました。宮田さんをはじめ、おもだつた人たちが、いそいで船長室に集まり、相談をはじめました。

「やつぱり、この船についてきたのですね。むろん金塊をぬすみだすつもりでしよう。なんとかして、それをふせがなければなりません。」

宮田さんが、あおざめた顔で心配そうにいいました。すると、船長もうなずいて、

「こんな怪物は、われわれの手では、どうすることもできません。場合によつては、海上自衛隊の応援をたのまなければなりますまい。海の中へ、大砲でもうちこんで、ころしてしまうほかはありません。いずれにしても、無電で本社へ相談します。そして大阪から、応援隊を送つてもらいます」

すると、そのせきにいたサルベージ会社の技師が、口をひらきました。

「それにしても、時間がかかりますね。怪物はもう金塊のありかを、さがしだしかもしれませんよ。そして、ぬすみだされてしまつたら、もうおしまいです。……船長、あれをつかつてみたら、どうでしよう。」

「ダイビング＝ベルかね。」

「そうです。あれにぼくがはいつて、怪物を見まもつてゐるんです。いくら鉄の人魚でも、あの機械なら、どうすることもできないでしよう。」

「うん、そうでもするほかはないね、じゃあ、きみがはいつてくれるか。」

ダイビング＝ベルというのは、あつい鉄でできた大きな玉のような潜水機です。その中に人間がはいつて、海の底へ沈むのです。

鉄の玉には、あついガラス窓があり、その上にサーチライトのような強い水中電灯がつ

いていて、海の中がよく見えるのです。

また、その鉄の玉には二本の鉄のうでがあつて、そのさきは、ものをはさむ大きなツメになつていて、鉄のツメです。

サルベージ会社では、潜水夫がもぐれないような深い海底の仕事をするときに、この潜水機をつかうのですが、船長は、まんいちのことをかんがえて、その機械を船につんできたのです。

ハヤブサ丸には、重い潜水機をあつかうための小型のクレーン（起重機きじゅうき）がそなえてありました。数名の船員が、クレーンを動かして、ワイヤーロープで、船倉から潜水機をつりあげ、その中へ、技師がはいりました。それから、機械を密閉すると、クレーンのむきをかえて、海面につき出し、そろそろと、潜水機を海の中へおろすのでした。

潜水機の中は、ちょうど飛行機の操縦室のように腰かけたまま、なんでもできるようになつっていました。席の前に、いくつもボタンがついていて、それをおせば、外の鉄のうでや、鉄のツメを自由に動かすことができるのです。

技師は、ガラスのぞき窓から、じつと海の中を見ていました。機械はぐんぐんさがつていています。窓の上の強い電灯の光で、十メートルさきまでも、はつきり見えます。その

光の中を、大小さまざまの魚類が、右に左に泳いでいるさまは、じつに美しいけしきでした。

潜水機は、沈没船のハッチの中へはいりませんから、ハッチの入口のそばまでいつて、そこで見はつているつもりなのです。

窓から見ていると、海底の沈没船が、だんだん大きくなつてきます。つまり、こちらがその方へ近づいていくのです。

「おや、おそろしく大きなさかなだぞ。」

技師はおもわず、ひとりごとをいいました。電灯の光もとどかない、ずっとむこうの方から、クジラの子どもとでもいうような、でつかいさかなが、こちらへやつてくるのが見えたからです。

このへんにもクジラがこないとはいませんが、どうもクジラとともにがつていました。

それに、おかしいのは、目がおそろしく大きくて、自動車のヘッドライトみたいに、ギラギラ光つていることです。まるでメダカのように目が大きくて、しかもメダカの何万ばいもあるずう体をしているのです。こんなへんなさかなが、ほんとうにいるのでしょうか。

そんなことを考えているうちに、その巨大なさかなは、だんだんこちらへ近づいてきま

した。目が大きいばかりでなく、口が五月のぼりのコイのように、まんまるです。そして、その口がすこしも動かないのです。目の光は、ますます強くなつてきました。まるでサチライトのように、その前の水が、パツと明るくてらされているではありませんか。巨大なさかなの背中には、すきとおつた空気ぶくろのようなものがついています。ひらべつたいふくろです。

「や、や、あれはさかなじやない。潜航艇だつ。魚形潜航艇だつ。」

技師はおもわず、とんきような声で叫びました。それは鉄でできていたのです。二つの目と見えたのは、潜航艇のヘッドライトだったのです。あのまるい口は、ひよつとしたら、大砲のつつ先なのかもしません。

それにしても、このへんてこな潜航艇は、いつたい、どこの国からやつてきたのでしよう。いやいや、どこの国でもない。これはきっと、悪魔の国からやつてきたのにちがいありません。

海底の大闘争

「おやつ、へんなものがいるぞ、いつたい、あれはなんだろう。」

技師はギョツとして、潜航艇の背中を見つめました。前についている二つの目だまの光が、あまり強いので、背中の方は、よく見えなかつたのですが、そこに、おそろしいものが、うすくまつていたのです。

鉄の人魚です。鉄の顔、鉄のトサカ、耳までさけた口から、二本の牙がニユーッとつき出していて、からだはワニのような怪物です。そいつが、魚形潜航艇の背中に、ヤモリのようペツタリくつついて、青く光る目で、じつと、こちらをにらんでいるのです。

技師は、鉄の玉の中にはいっているのですから、どんな怪物がやつてきても、へいきなのですが、しかし、かれは、鉄の人魚の姿のおそろしさに、ゾーッとして、からだがすぐんでしまいました。

魚形潜航艇は、すぐ目の前にきていました。むこうは、自由じざいに動けるのに、こちらはハヤブサ丸からロープでつりさげられているのですから、にげることもできません。

技師は潜水機の中にある電話機をとつて叫びました。

「はやく引きあげてくれえ……。おそろしい潜航艇がやつてきた。その背中に、鉄の人魚がのつている……。」

「なに、潜航艇だつて？ それはほんとうかつ。」

ハヤブサ丸の船長の声が、ききかえしてきました。

「そうだ。さかなかたちをした、おそろしい潜航艇だ。もう目の前に近づいてきた。あぶない。はやく、はやく、引きあげてくださいつ。」

すると、ハヤブサ丸では、引きあげ作業をはじめたらしく、潜水機はすこしづつ、上方へのぼつていきます。

そのとき、ギヨツとするようなことが、おこりました。

目の前の、魚形潜航艇の、まるい口のような穴から、ヘビの舌みたいな、長い黒い棒が、パツと、とびだしてきたのです。その棒のさきは二つにわれていて、ものをはさむようになつっていました。そして、そのハサミが、技師の乗つている潜水機の上方へ、のびてきました。

技師はいそいで、上にひらいている小さなガラス窓からのぞきました。あつ、怪物の鉄のハサミは、潜水機をつりあげているロープを、はさもうとしているではありませんか。「たいへんだあ。敵はロープを、きろうとしている。はやく、はやく、もつとぐんぐん、引きあげてくれつ。」

ハヤブサ丸では、ロープまきとりのエンジンを、いつそはやく回転させました。その力で、潜水機がグラツとゆれて、真上にいる魚形潜航艇にぶつかりそうです。

技師は、前にあるハンドルを、めちゃくちやに、まわしました。すると、潜水機の外につき出している鉄の腕が、左右にグツグツと動いて、潜航艇のよこはらを、たたきつけました。艇の背中に、しがみついている鉄の人魚が、ぐつと、こちらに首をのばして、リンのよう光る目で、にらみつけました。

技師は、またハンドルを、ガチガチります。鉄の腕が怪物の方にのびて、ワニのようなしつぼを、つかみそうになりました。

潜航艇の鉄の舌と、潜水機の鉄の腕の、おそろしいつかみあいです。機械と機械の、たたかいです。

海の底の水はうずをまいて、あわだち、さかなどもは逃げまわり、まるい鉄の潜水機は、ブランブランとゆれ動き、潜航艇はロープをはなすまいと、右に左にしつぼをふり、鉄の人魚は、その背中の上で、あばれまわり、命がけのたたかいが、つづけられました。

しかし、ついに、鉄のハサミの力よりも、ハヤブサ丸のまきあげ機の力が強かつたのです。ロープはぐんぐんまきあげられ、潜水機は鉄のハサミをふりはなして、海面へと引き

あげられてきました。

潜水機から出て、ハヤブサ丸の甲板にあがつた技師は、ぜんしんびつよりのあせで、まつかになつた顔から、ボトボトと、あせがしたたつていました。かれは、ひとやすみする、船長や賢吉君のおとうさんなどに、海底のたたかいのもようを、くわしく話してきかせました。

「敵が潜航艇をもつていようとは、思いませんでした。鉄の人魚には、たくさんの中まがあるので。これではとても、かないつこありません。こちらは、自由のきかない潜水機しかないので、敵は海の底を走りまわる、潜航艇をもつてているのです。いよいよ爆雷ばくらい、でもなげこむほかはないですね。」

もう海上自衛隊のおうえんをたのむしかありません。船長は大阪の支社へ無電をうつて、ことのしだいをしらせました。するとそれにこたえて、支社から、みんなをびっくりさせるような無電が返つてきたのです。

「アケチタンティ、ユウリヨクナブキヨモチ、ケサ、シユツパツシタ、ゴゴ五ジ、ソチラニツクハズ」

ああ、明智探偵が来るというのです。しかも、有力な武器をもつて、やつて来るという

のです。人びとはこおどりして、思わずばんざいをさげびました。

明智探偵きたる

午後五時といえば、もう一時間あまりのちです。みんなは、そのまま甲板に立ちつくして、明智の乗つている船が来るのを待つていました。

「有力な武器つて、いつたいなんだろうね。いくら名探偵でも、敵が魚形潜航艇をもつているとは知らなかつただろうから、あれに勝てるような武器をもつてくるかどうか、心配だね。」

船長は技師にむかつて、そんなことを、ささやいていました。無電で問い合わせても、武器のことはなにもこたえないのでした。

こちらでは小林少年と賢吉少年が、明るい顔で話しあっていました。

「小林さん、さすがは明智先生だねえ。きのう、この船から、きみがうつた無電で、鉄の人魚がついてきたことを知つて、先生はすぐに大阪へこられたんだね。きっと飛行機だよ。そしてけさはやく、大阪港を出発されたんだね。それにしても、有力な武器つて、なんだ

ろう？」

「ぼくもしらないよ。先生はいつも、ぼくたちよりも、ずっとさきのことを考えていらつしやる。だから、この事件をひきうけられたときに、ちゃんと武器の用意ができていたのかもしれないよ。もうだいじょうぶだ。先生がきてくれば、もうしめたもんだよ。」

小林君は、うれしそうに、にこにこしていつのでした。

やがて、はるか水平線のかなたに、ひとすじの煙が見え、双眼鏡をのぞくと、そこに白い汽船の小さな姿があらわれました。商船会社のカモメ丸という快速船です。それは潮ノ岬を通過する定期客船ですが、ひじょうに速力のはやい船なので、明智はそれに乗つてくるということが、無電でわかつていたのです。

船体をまつ白にぬつたカモメ丸は、見る見る大きくなつてきました。ハヤブサ丸の甲板の人たちはハンカチをふり、ばんざいをとなえて、これをむかえました。

美しいカモメ丸は、五十メートルほど、むこうの海面にとまり、ボートがおろされていきます。むこうの甲板にも、船客たちがすずなりになつて、こちらを見ていています。きっと金塊引きあげのうわさをきいていたのでしょう。

おろされたボートは、四人の水夫がオールをこいで、一直線にこちらへ近づいてきまし

た。ばんざいの声が、ハヤブサ丸の甲板にどよめきました。

ボートの中に、すつと立っているのは、われらの名探偵明智小五郎でした。せいの高いらだに、よくにあう黒の背広、モジヤモジヤ頭を、風になびかせ、右手を高くあげて、あいさつしています。

「おやつ、あれはなんだろう。海ぼうずみたいなものが、やつてきたぞ。」

だれかが、どなりました。見ると、カモメ丸の船尾の方から、黒い大きな怪物が、ボートのあとをおつて、こちらへやつてくるではありませんか。背中に大きなコブのある、クジラのような黒いやつです。よく見ると、背中のコブの上に、ほそい鉄の棒のようなものが立っています。小林君がさけびました。

「賢ちゃん、あれペリスcopeだよ。潜航艇の中から海の上を見る潜望鏡だよ。だから、あれは潜航艇なんだ。ワーッ、すてき。ぼくたちの潜航艇がきたんだよ。」

「ほんとだ。もうだいじょうぶだね。あれで、敵の魚形潜航艇をやつつけちやうんだ。ねえ小林さん、明智先生はえらいねえ。」

ふたりの少年は、おどりあがつて、よろこぶのでした。甲板の人たちも、みかたの潜航艇がきたというので、大きわぎです。またしてもばんざい、ばんざいの声が、わきあがり

ました。

やがてボートはハヤブサ丸に横づけになり、明智は鉄ばしごをのぼって、甲板に姿をあらわしました。そして、すがりついていく小林君の肩をだきながら、賢吉君のおとうさんと船長と技師とに、あいさつし、おたがいの報告をとりかわすのでした。おおぜいの船員たちが、そのまわりをぐるつととりまいて、名探偵の姿に見いつています。

「そうでしたか。敵も潜航艇をもつていたのですか。ぼくはそこまでは考えなかつたけれども、鉄の人魚をやつつけるのには、潜航艇がなくてはだめだと思ったので、さいしょからその用意をしていました。いま日本には、むかし海軍がつかつたような潜航艇はないけれども、民間でつくつた海底遊覧用の小型潜航艇が、東洋汽船会社に保管されていることを知つたので、それに手入れをして、いつでも動くように、用意させておいたのです。そういう潜航艇ですから、水雷^{すいらい}を発射することはできませんが、かたちは海軍の潜航艇をそのまま小さくしたようなものです。敵をおどかすのにはじゆうぶんです。

その潜航艇は神戸から大阪湾にまわしてあつたので、それをカモメ丸にひかせて、ここまでつてきたのです。」

それから、しばらく相談したあとで、明智は、つぎのような案をだしました。

「あの潜航艇には、うでのある操縦士がふたりのっています。やりかたをよくおしえたうえ、あれを大洋丸のそばへ沈めるのです。そして、敵の魚形潜航艇を、遠くの方へ、おびきだします。三十分ぐらいはかならず、大洋丸から遠ざけておきます。われわれの潜航艇には無電装置がありますから、刻々その報告をうけることができます。そして、その三分のあいだに、この船から潜水夫がもぐり、大洋丸の中をさがして、金塊のありかを、さがすのです。三十分ずつにくぎつて、なんどでも、それをくりかえすことができます。」

そこで、ともかく、その方法でやつてみるとことになりました。いよいよ、明智の潜航艇と敵の魚形潜航艇とのたたかいがはじまるのです。

だんだら怪人

大洋丸の沈んでいる海底には、魚形潜航艇がゆうゆうと泳ぎまわっていました。その背中には、やつぱり、鉄の人魚がうずくまっています。この怪物は、潜航艇の上部のガラス窓から、中の手下たちにさしづをしているのでしょうか。まるで将軍が馬にまたがるように、

潜航艇にまたがつてているのです。

そこへ、ふいに水がさわいで、上方から、スースと大きな黒いものがおりてきました。明智の潜航艇です。この潜航艇は遊覧用のものですから、前と横とに、あついガラスの窓がついています。その窓から艇内の電灯の光がもれているのです。それを遠くから見ると、へんなところに三つ目のある怪物のようです。

鉄の人魚はそれに気づくとギョツとしたように、身がまえをして、じつとその方をにらんでいます。

潜航艇は魚形艇とおなじ深さまで沈むと、そこにとまって、いきなり、艇内の電灯をパツパツと、つけたり消したりしました。そのたびに、三つのガラス窓が、またたきでもするように、暗くなつたり、明るくなつたりするのです。

これは、明智探偵にいつけられたとおり、光によるモールス信号を発しているのです。トン・トン・ツーという、あの電信のモールス信号を、光によつて、やつてているのです。怪物団の方にも、モールス信号ぐらい、わかるやつがいるだらうと、それをためしているのです。

すると、魚形潜航艇の二つの目が、パチパチとまたたきはじめました。モールス信号が、

わかるという答えです。そこで、こちらは、ほんとうの通信をおくりました。

「スグニココヲ、タチノケ、タチノカナケレバ、スイライヲ、ハツシャスルゾ」

水雷なんかもつていないので、こちらは海軍の潜航艇とおなじかたちですから、そういうえば、敵はおどろくにちがいないので。

あんのじょう、魚形潜航艇は動きだしました。大洋丸のそばをはなれて、どこかへにげていくのです。

こちらは、すかさず、それを追つかけます。二せきの小型潜航艇は海底競走です。二つ目玉の小クジラを追う、三つ目の怪物、その通過するみち、海水はさかまき、さかなどもは、はねとばされ、長い海草は、あらしにふきつけられたように、みだれさわぎ、すさまじい海の底の追つかけっこです。

明智の方の潜航艇は、なんといつても遊覧用ですから、それほどの速力はありません。ざんねんながら、魚形艇の速力には、かなわないのです。だんだん、あいだがへだたつていくばかりでした。

そして、五分ほど追つかけているうちに、あいてを見うしなつてしましました。あいては、二つ目玉のようなヘッドライトを消したのです。そして、海の底の暗やみにまぎれて、

どこかへ見えなくなつてしまつたのです。こちらの操縦士たちは、なんだか敵が、パツとかきけすように見えなくなつたような気がしました。忍術でもつかつたようなかんじでした。しかしどもかく、敵を追つぱらつたのですから、あとは、大洋丸のまわりをぐるぐるまわつて、けいかいさえしていればよいのです。そこで、ハヤブサ丸の明智探偵に、無電をうちました。

「テキティモ、テツノニンギヨモ、ニゲサツタ、ホンティハ、フキンノ、ケイカイニアタル、スグ、センスイフヲイレヨ」

その無電をうけたハヤブサ丸では、ちゃんと用意をしてまつていた、ひとりの潜水夫を、すぐに大洋丸へと、もぐらせました。いちばん、うでききの潜水夫です。

右手に鉄棒、左手に水中電灯をさげた潜水夫は、一度はいつたことのある船室へと、ハツチをくだつていきました。鉄の人魚はにげさつたというのですから、なにもこわいものはありません。金塊のありがさえ、さがしだせばよいのです。

水中電灯をふりてらしながら、広い船室の中をあちこち見まわつていますと、一方の壁に、大きな四角な穴があいているのに気づきました。「おやつ。」と思つて、よく見ると、貝がらがいっぱいいて、よく見わけられなかつたのですが、そこにドアがあつて、

それがひらいていたのです。

ひとりでにひらくわけはありません。何者かが、じぶんよりさきにきてドアをひらいたのです。潜水夫はそこまで考えると、ギョツとして、たちすくんでしました。鉄の人は魚は、もういないはずです。では、何者がひらいたのでしょうか。

それとも、もしかしたら、怪物団のやつが、ここをひらいて、とつくに金塊をぬすみだしてしまつたのではないでしょうか。いずれにしても一大事です。かれはそれをたしかめるために、電灯をふりかざして、そつと、ドアのむこうを、のぞいて見ました。

すると、その小さい部屋の中に、ぼんやりと光っているものがあるのです。水中電灯が、部屋の床においてあるのです。ハツとして、なおよくみると、おお、そこには、じつに気味のわるいへんなやつが、うごめいていたではありませんか。

そいつは人間のかたちをしていました。しかし、ふつうの人間ではありません。からだじゅうに、太いまつ黒なしまがあるのです。白黒ダンダラぞめの怪物です。美しいしまのあるタイがいますね。あれとそつくりのダンダラぞめの怪人です。

顔は人間ですが、まるでゴリラみたいな、おそろしいやつです。その顔が、ガラスでもかぶせたように、ギラギラ光つて、それから、頭のうしろに、まつ黒なギザギザのトサカ

みたいなものがついているのです。足の先にはアザラシのヒレのような大きな水かきがついています。

その怪物が、ひとつ木の箱を、こわきにかかえて、ひよいとこちらをむきました。そのうしろの、壁ぎわには、おなじような木箱が、うすだかくつんであります。

「ああ、わかつた。金塊はここにあつたのだ。この木の箱にいれて、ここにつんであつたのだ。」

潜水夫は、とつさに、それをさとりました。ダンダラぞめの怪物は、やつぱり金塊どうぼうだつたのです。潜水夫は潜水カブトの中の電話口にむかつて、どなりました。

「金塊どうぼうを見つけました。ダンダラぞめの怪物です。ひとつらえてやります。すぐ応援をよこしてください。」

そうちどなつておいて、かれはいきなり、ダンダラ怪人に、つかみかかっていきました。

おばけガニ

深い水の中ですから、パツと、とびつくことはできません。ふわりふわりと、泳ぐよう

にして、あいてにくみついたのです。

ダンダラぞめの怪人は、それを見ると、びっくりして、金塊の箱をすてて逃げだそうとしましたが、もうまにあいません。そこで、しまダイのような怪物と、西洋のよろいのおばけみたいな潜水夫との、おそろしい、とつくみあいが、はじまつたのです。

外の部屋ほどではありませんが、その部屋にも、二十年のあいだの海のゴミがたまつていました。ふたりの格闘につれて、そのゴミがもやもやとたちのぼり、あたりは、まるで、煙につつまれたようになつてしましました。

ダンダラぞめの怪人は、逃げよう、逃げようとしているので、ふたりは、とつくみあいながら、いつのまにか、ドアの外に出て、それから甲板にのぼる鉄の階段の下まできました。

そのへんには、コンブのような、大きな葉の海草が、たくさんはえています。逃げおくれた魚もおよいでいます。そのなかで、よろいのおばけと、ダンダラぞめどが、よこになつたり、さかさまになつたりして、とつくみあつてているのです。陸上のけんかとちがつて、海の底の格闘は、映画のスローモーションのように、のろのろした、じつにうす気味わるいものでした。

階段の下までくると、ダンダラぞめの怪人が、にわかに、いきおいよくなりました。そして、まるで魚のように、ピチピチとはねまわるものですから、潜水夫の、つかんでいた手が、すべて、はなれてしまいました。

すると、怪人は、足のさきについている、大きな水かきで、サーツと水をけつて、みるみる階段の上へ浮きあがつていきました。潜水夫は重いナマリのついたくつをはいているのでとても、そのまねはできません。一だんずつ、階段をのぼつていくほかはないのです。ざんねんながら、どうとう敵を逃がしてしまいました。

潜水夫は、おおいそぎで、もとの船室にもどり、水中電灯をもつて、甲板にあがりました。

すると、大洋丸の大きな船体から、すこしはなれた海底を、白い光がぐんぐんむこうの方へ動いているのが見えました。水中電灯です。怪人は水中電灯をもたないで逃げたのですから、それは怪人ではありません。いつたい、なにものでしよう？

「ああ、わかつた。ぼくの友だちが、あとからもぐつてきただんだ。そして、怪人をみつけて追つかけているのだ。」

潜水夫は、そうおもつたので、いそいで、そちらへ近づいていきました。さつき潜水力

ブトの中の電話で、ハヤブサ丸に「おうえんをたのむ。」と、よびかけておいたので、もうひとりの潜水夫が、もぐつてきたのです。

怪人は電灯がないので、方角がわからなくなり、コンブ林の中で、まごまごしているうちに、ふたりの潜水夫に、はさみうちになつてしましました。怪物の目玉のような水中電灯が、右と左から、ぐんぐんせまつてくるのです。

怪人はやつとのことで、コンブ林をぬけだし、ゴツゴツした岩ばかりの海底を逃げていきます。ふたりの潜水夫は、五メートルほどあとから、それを追つかけてくるのです。

怪人のダンダラぞめの姿が、大きな岩かげに、かくれました。ふたりの潜水夫は、そこへいそぎましたが、陸上のように、はやくは、はしれません。やつと岩かげにたどりついてみると、そこにはもう、なにもいませんでした。

どこへ逃げたのかと、水中電灯をふりてらして、四方八方をすかして見ましたが、どこにも敵の姿がありません。

たつた、あれだけのひまに、遠くへ逃げられるはずはないのです。といつて、この大岩のほかには、かくれるような場所もありません。ふたりの潜水夫は、「へんだなあ！」というような身ぶりをして、潜水カブトの顔を見あわせました。

ふたりが、なおも、あたりをさがしていますと、大岩のねもとに、なにかもぞもぞと動いているのに気がつきました。青ぐろい岩が、うごめいているのです。ふたりはおどろいて、その方へ水中電灯をさしつけました。

いや、岩ではありません。岩とそつくりの、なんだか、えたいのしれない大きなものが、岩のねもとをはなれて、こっちへやつてくるのです。

「あつ、カニだつ！」

ひとりの潜水夫が、かぶとの中で、おもわずさけび、その声がハヤブサ丸の受話器に、けたたましくひびきました。

岩と見えたのは、一ぴきの巨大なカニでした。人間の二倍もある、おそろしいカニでした。一メートルもあるような大きなハサミを、ぐつともちあげて、ひらいたり、しめたりしながら、八本の足で、ごそごそと、はつてくるのです。

ゴムまりほどの、白っぽい目玉が、ニユーッと、とびだしています。その目玉をぐるぐるまわしながら近づいてくるのです。

「ワーッ！」というような、さけび声が、二重になつて、ハヤブサ丸の受話器にひびきました。ふたりの潜水夫が、一度に、さけんだのです。そして、いきなり逃げだしたのです。

おばけガニは、逃げる潜水夫たちを、五一六メートル追っかけましたが、なにをおもつたのか、そのまま向きをかえて、むこうの方へ、とおざかっていきます。そして、やみの中へとけこむように、見えなくなつてしましました。

ふたりの潜水夫は、潜水カブトの中の電話で、すぐに、引きあげてくれるよう、たのみました。

ハヤブサ丸の甲板にもどると、みんなにとりかこまれて、海底のできごとをくわしく話しましたが、それをきいた明智探偵は、小首をかしげながら、こんなことをいいました。「そんな大きな力二が、このへんにいるはずはない。ひよつとしたら、悪人の手品かもしれないぞ。力二のいじょうをかぶつて、逃げだしたのかもしれないぞ。そのいじょうは、うすい金属かビニールで、できているのかもしれない。そして、それを小さくおりたたんで、岩の穴の中に、かくしておいたのかもしれない。」

「えつ、すると、あの力二の中に、金塊どろぼうが、はいつていたのでしょうか。」

潜水夫のひとりが、びっくりしていいました。

「どうも、そうとしかかんがえられない。岩のかげにかくれたまま消えてしまうなんて、人間わざではできることだからね。金塊どろぼうの怪人団は、魔術師だよ。いよいよ、

その本性をあらわしてきたんだ。おもしろくなつてきたね。ぼくは、こういう魔術師みたいないなあいでないと、はりあいがないのだよ。」

名探偵は、そういうつて、モジヤモジヤの頭を、指でかきまわしながら、につこり笑うのでした。

とびちる金塊

そのころは、もう西の空が、夕やけ雲で、まつかにそまつていきました。太陽は目に見えて、沈んできます。やがて、東の空がまつ暗になり、それが西の方にひろがつていつて、とうとう夜がきました。

しかし、敵に金塊のありかがわかつたとすると、夜だからといつて、やすんでいるわけにはいきません。明智探偵と、船長と、賢吉少年のおとうさんの宮田さんなどが、ひたいをあつめて相談しました。そして、夜でもかまわないから、大きなしかけで、いつぺんに、金塊を引きあげてしまおうということになりました。

ハヤブサ丸には、太い鉄のくさりでできた大きな網のようなものが、用意してありまし

た。重い荷物をまきあげる道具です。

それにワイヤーロープをくくりつけて、クレーンで海の底におろし、金塊の箱を鉄のくさりの網にいれて、引きあげようというのです。

それがきまると、敵の魚形艇をけいかいしている潜航艇に、無電で、一度浮きあがるよう伝えました。そして、じゅうぶん用意をしたうえで、鉄の網といつしょにもう一度沈み、引きあげがおわるまで、けいかいにあたせるわけです。

鉄の網には、三人の潜水夫がついていくことになりましたが、それだけでは安心ができないので、あの巨大な鉄の玉の潜水機も、いつしょに海底に沈み、大洋丸の甲板のハッチの外で、見はりをすることにしました。

ぜんぶの船員が力をあわせて、それらの用意をしているとき、小林少年が、明智探偵にすがりつくようにして、しきりとなにかをたのんでいました。

「ねえ、先生、ぼくを潜水機にのせてください。潜水夫のまねなんか、ぼくみたいな子どもには、とてもできませんけれど、潜水機ならだいじょうぶでしょう。技師さんの前に乗ればいいんです。そのくらいのすきまはあります。ねえ、先生、たのんでください。」

明智探偵は、小林少年をじぶんの子どものように愛していましたから、そんなにせがま

れると、いやとはいえないのです。にが笑いをしながら、技師に相談してみました。すると、技師もにこにこして、

「そんなに乗りたいのなら、いつしょに乗つてもいいですよ。すこしきゅうくつですが、からだの小さい小林君なら、乗れないこともないでしよう。かわいらしい小林君といつしょなら、ぼくもたのしいですよ。」

と、しようちしてくれました。

「小林さん、潜水機に乗るんだつて？ ぼくも乗りたいなあ。」

賢吉少年が、うらやましそうにいいました。

「きみは、とてもおとうさんが、ゆるしてくれないよ。ぼくより小さいんだし、冒険になれていなからね。でもさいしょ、ぼくが乗つてみて、だいじょうぶだつたら、このつぎに、きみが乗ればいいじやないか。」

小林君はそういって、賢吉少年をなぐさめました。

三十分ほどで、すべての用意がととのいました。まず潜航艇が沈んで大洋丸のまわりをけいかいし、つぎに潜水機が沈み、さいごに鉄の網と三人の潜水夫が沈んでいきました。

小林君はうれしくてたまりません。技師のひざにだかれるようになつて、からだを小さ

くして、まえのガラス窓をいつしんにのぞいていました。

潜水機には、電車のヘッドライトのような、強い電灯がついていますから、夜の海のなかがよく見えます。

窓の外を魚が泳いでいます。カンテンみたいな、すきとおつたクラゲが、ふわふわしています。それらが、スーツと、上方へ、あがつていくのです。つまり潜水機の鉄の玉が、ぐんぐんさがつていくのです。ちょうどエレベーターに乗つてているような気持です。

「ほら、あれが大洋丸だよ。でつかいだろう。」

技師のことばに、下を見ますと、貝がらのいっぱいにいた巨大な船体がよこたわつていました。それが、スーツと近づいて、潜水機は、大洋丸のはすになつた甲板の、ハツチの近くにとまりました。

むこうの方を、目玉のように光るものが、スーツと、とおりすぎました。

「あれ、なんですか？ 自動車のヘッドライトみたいなもの。」

「潜航艇だよ。ああして、大洋丸のまわりを、ぐるぐるまわつていてるんだ。いつ、敵の魚形潜航艇があらわれるかもしねりないからね。」

そのうちに、空中から、いや、海中の上方から、きみようなものが、スーツときがつ

てきました。鉄の網と、それとりついた三人の潜水夫です。

鉄の網は、甲板のハツチのすぐそばにおろされ、三人の潜水夫は、水中電灯をふつて、こちらへあいさつをおくりながら、つぎつぎと、ハツチの中へおりていきました。

おりていつたあとには、三本のロープと送気管が、長いフジづるかなんかのよう、ゆらゆらとゆれていましたが、しばらくすると、その一本が、ピンとはりきつて、つまり、上からひきあげられて、ひとりの潜水夫が、四角な木の箱をかかえて、ハツチから出てきました。そして、その箱を、鉄の網の中へいれました。いれておいて、またハツチの中へもどつていくのです。

すると、つぎの潜水夫があらわれ、おなじような箱を、鉄の網にいれ、もどつていくと、また、つぎの潜水夫というぐあいに、三人の潜水夫がハツチから出たり、はいつたりしているうちに、鉄の網の中には、だんだん、箱の数がふえていきました。

金塊の箱は、ぜんぶで三十個ありましたが、一度にはむりなので、半分の十五個を、鉄の網にいれると、潜水夫が電話でしらせて、引きあげることにしました。

十五箱で、ふくらんだ鉄の網は、それをさげてある太い鉄のロープがピンとはつて、ゆらゆらと引きあげられています。三人の潜水夫は、はすになつた甲板に立つて、それを

見あげています。

ところが、鉄の網が十メートルほどあがつたときです。潜水夫のひとりがとびあがるよう、へんなかつこうをして、鉄の網の上方を、両手でゆびさしているのです。すると、あのふたりの潜水夫も、おなじように、両手をあげて、きちがいのようになりはじめました。

「おや、へんだぞ。もしもし、潜水機を、十二メートルほど、引きあげてください。鉄の網のロープがどうかしたようです。はやく、あげてください。」

技師が電話口にどなりました。

潜水機がガクンとゆれて、スーツと上にあがつていきます。鉄の網を、おいこして、ロープのところにきました。

「そのまま、鉄の網と潜水機と、おなじ速度で、引きあげてください。」

電話でいつておいて、まえのハンドルを動かすと、潜水機の窓が、ロープの方をむき、強い電光がそこをてらしました。

「あつ、カニだつ、カニがロープにぶらさがつていてる。」

小林君が、おもわずさげました。人間の二倍もある、あのおばけガニです。そいつが

鉄の網のロープにすがりついて、なにかモガモガやっているのです。

「あつ、たいへんだ。あいつはロープをきろうとしている。大きなヤスリを、ノコギリのようすに動かしている。」

「こんどは、技師がさけびました。そして電話口へ、

「もしもし、潜水機を、鉄の網に近づけてください。ロープをきろうとしているやつがいるのです。こちらは鉄のツメで、攻撃します。」

スーッと、ロープへ近づいていきました。巨大なカニが、すぐ目の前にうごめいています。

「さあ、たたかいだつ。見ててうらん。いまに鉄のツメで、あいつを、やつつけてやるから。」

技師は、いさましくさけぶと、まえのハンドルに手をかけました。ギーッという音がして、潜水機のよこについている、巨大な鉄のはさみが動きはじめました。

カニの背中は、すぐまえにあるのです。鉄のツメは、その方へ、ニューッと、のびていきました。しかし、潜水機そのものが、上からぶらさがっているのですから、おもうようになります。いまひといきというところで、とどかないのです。

「もつと、近づけて、もつと、もつと。」

電話口にどなりながら、技師は、歯ぎしりをして、ハンドルをうごかしています。
「あつ、とどいたつ、しめたぞ。」

ハンドルをガチンとやると、鉄のツメがグツとはさみました。カニの足を一本はさんで、
ぐいと、もぎとつてしまつたのです。

しかし、あいては、へいきです。つくりものの足をきりとられたつて、なんでもあります。
せん。

ヤスリの動きは、ますますはげしく、キーキーという音が、潜水機の中まで聞こえてく
るような気がしました。

鉄の網も、潜水機も、全速力で、引きあげられています。

ロープがきれないうちに、あげてしまおうというのです。

もう、ハヤブサ丸から十メートルほどになりました。いまひとときです。

しかし、ああ、そのときです。とうとうロープがきれたのです。おばけガニはロープか
らはなれて、スーツと、むこうへ消えていきました。

鉄の網は、おそろしいきおいで下へ落ちていきます。網がひろがつて、十五の箱が、

バラバラにちらばつて落ちていきます。そして、あるものは、大洋丸の甲板にぶつかり、あるものは海底の岩にぶつかり、くさつた木の箱はこわれて、とびちり、ピカピカひかつた金塊が、八方に散乱しました。

賢吉少年の危難

それがわかると、ハヤブサ丸では、おおさわぎになりました。すぐに、五人の潜水夫をもぐらせて、金塊を集めることにしましたが、五人も潜水させるためには、いろいろの用意をしなければなりません。それにもつ暗な夜のことですから、いつそう仕事がむずかしいのです。

ハヤブサ丸の甲板には、明るい電灯が、いくつも、つりさげられ、そのしたで、おおぜいの船員たちが右に左に、かけまわって、潜水の用意をしているのです。

賢吉少年は、おとうさんのそばで、そのいさましいありさまを、ながめていましたが、ちよつと、じぶんの船室に用事があつたので、そこへおりるハツチの方へいきますと、むこうの、暗い甲板から、ひとりの水夫が、しきりに手まねきしているのに、気づきました。

船のなかの、おもだつた人びとや、船員たちは、みんな、一方のふなばたにあつまつて、潜水夫をおろす仕事をしていました。電灯もそのへんだけについていて、ほかの甲板はまつ暗なのです。そのまつ暗な甲板から、水夫が手まねきしているので、賢吉少年はふしづぎに思いました。

「なんですか。」

とたずねますと、その水夫はにこにこして、「小林さんが、あつちに待つているんです。ぼっちゃんを、よんできてくれと、いわれましたのでね。」

と答えました。小林さんというのは、もちろん、明智探偵の助手の、小林少年のことです。小林少年は、まるい鉄の潜水機にはいって、海底に沈んでいましたが、さつき潜水機が引きあげられ、その中から出て、じぶんの部屋でやすんでいるはずです。それが、どうして、いまごろ賢吉君をよぶのでしょうか。

「小林さんは、どこにいるのですか。」

賢吉少年が、また、たずねますと、水夫は、船尾の方をゆびさして、「あちらです。ぼっちゃんに、急用があると、いつています。」

と答えて、まつ暗な船尾の方へ歩いていきます。賢吉少年は、へんだなとおもいましたが、まさか、ハヤブサ丸に、敵がいるなんて、おもいもよらず、少年探偵団長の小林君がよんではいるとあつては、団員として、命令に、そむくわけにいきませんから、つい、うつかりと、その水夫のあとについていきました。

船尾の甲板は、氣味がわるいほどまつ暗でした。すかして見ても、人かげらしいものは見あたりません。

「小林さんはどこにいるんですか。だれもいないじやありませんか。」

すこし、こわくなつて、そういうと、水夫は、

「ほら、そこですよ、あのタルのむこうですよ。」

といつて、賢吉少年の手をとりました。

見ると、三メートルほどむこうに、大きなビールのタルのようなものが、おいてあります。ふつうのビールダルよりは、ずっと大きなやつです。

小林さんはタルのかげなんかでなにをしているんだろうと、ふしきにおもつて、いそいで、そこへ近づきましたが、タルのむこうを見ても、だれもいないのです。タルのふたがとれていましたので、もしタルの中にいるのではないかと、のぞいて見ましたが、タ

ルの中は、酒も水もはいつていない、からっぽでした。

「あつ、なにをするんです……。」

と、いおうとしたとき、大きな手が、賢吉君の口をぐつと、おさえてしました。もがこうとしてももうひとつ手が、からだをだきしめているので、どうすることもできません。

水夫は、賢吉君をだきあげて、なんのくもなく、その大ダルの中へおしこみ、上からふたをして、ポケットから、とりだしたクギとカナヅチで、コンコンと、うちつけてしました。

あつというまのできごとでした。船の人たちは、みんな潜水作業の方に集まっているので、だれも気づいたものはありません。それにしても、この水夫は、いつたい何者なのでしょう。賢吉君をタルづめにして、どうしようというのでしょうか。

もしかしたら、この水夫は、鉄の人魚の怪人団の、まわし者だったのではないでしょうが。ハヤブサ丸が、大阪を出るときから、水夫にばけて、乗りこんでいたのではないですか。

水夫は、そこにおいてあつた長いロープを、タルにまきつけてかたくむすび、タルをも

ちあげると、船尾のふなばたまではこびました。そして、じつと、くらい海を見おろしているのです。

すると、そのとき、ハヤブサ丸から三十メートルはなれた海面に、パツと光つたものがあります。海の上にガラスのような、まるいものが浮いていて、その中に電灯がついたのです。ついたかとおもうと、すぐ消えてしましましたが、ひとめで、それがなんであるかが、わかりました。それは、あのおそろしい魚形潜航艇だつたのです。

クジラのような黒い船体が、はんぶんほど浮きあがつて、その背中に出つぱつて、まるいガラスのようなものの中の電灯が光つたのです。きっと、ハヤブサ丸の水夫へ、あいざをしたのにちがいありません。

それから、じつにおそろしいことが、おこりました。水夫は両手でロープをにぎつて、賢吉君をとじこめたタルを、ふなばたから、海面におろしたのです。タルは、うちよせる波の上に、ゆらゆらと浮いています。

水夫は、うわぎをぬいで、シャツ一枚になると、ながいロープの一方のはしを、ふなばたのてすりにとおして、それを持つて、じぶんも海面におりていきました。そして立ちおよぎをしながら、てすりにかけたロープを、たぐりよせ、それを、じぶんのからだにまき

つけて、しづかにおよぎはじめました。いうまでもなく、魚形潜航艇をめざしているのです。

水夫が、およぐにつれて、ロープにつながれたタルも、その方へ引かれていきます。そして、見るまに、魚形潜航艇のそばへ近づいていきました。

すると、それをまつていていたように、魚形艇の背中の、まるいガラスが、パツと、上にひらいて、そこから、人の顔があらわれました。

「うまくいつたか。」

「うん、子どもはタルの中にいる。このロープを、しつぽの方へ、くくりつけてくれ。」

海の中の水夫が、そう答えて、魚形艇にのぼりつき、ガラスぶたの入口から中へすべりこみました。

すると、中にいた男が、いかがわって、魚形艇の背中にあらわれ、ロープのはしをもつて、艇のしつぽの方へ、走つていきました。

しばらくすると、その男が帰つてきました。

「しつかり、くくりつけた。これでもう、だいじょうぶだよ。」

そういうて、魚形艇の背中の入口へすべりこむと、まるいガラスのふたが、パタンとし

まり、魚形艇は、そのまま、しづかに海中に沈んでいきました。あとにはロープにひかれたタルが、プカプカと波にただよっているばかりです。

どうくつ 洞窟の怪異

タルにつめこまれた賢吉少年は、あまりのおどろきに、しばらくは、氣をうしなつたようになつていましたが、やがて、じぶんのはいつているタルが、ゆらゆらと、はげしくゆれていることが、わかりました。

「きっと海へなげこまれたんだ。そして、波のまにまにただよつているんだ。」
と、さとりました。

ああ、なんという、心ぼそい身の上でしよう。タルには少しのすきまもないのですから、ないてもわめいても、だれにも聞こえるはずはありません。

「おとうさん！ おかあさん！ 小林さーん！」

聞こえないとわかついていても、ひとりでに、口から出てくるのです。賢吉君は、いくどもいくども、声をかぎりに、叫びました。

そのうちに、とつぜん、タルのゆれかたが、かわつてきたのに気づきました。今までは、ゆらゆらとただよつていたのですが、それが、きゅうに、一方へ走りだしたようなかんじがするのです。波をのりこえ、おそろしい、いきおいで、進んでいるのです。なんだかひじょうなスピードの快速艇に、ひっぱられているような気持です。

ひっぱられるにつれて、タルはくるくるまわるのです。賢吉君のからだも、上をむいたり、横をむいたり、たえずくるくるとまわっています。そのたびに、からだのどこかが、タルにぶつかるので、その苦しさといつたらありません。

賢吉君は、こんな苦しいおもいをするぐらいなら、はやく死んでしまつたほうがいいとおもいました。

そのうち、からだが、むちやくちやに、ゆれるだけでなく、なんだか、いきが苦しくなつてきました。水もしみこまないほど、しつかり、ふたをしたタルですから、空気が悪くなつてきたのです。つまり、酸素がすくなくなつて、いきぐるしいのです。このまま、ながくタルの中にいたら、ほんとうに死んでしまうでしよう。

それから、どれほど時間がたつたのか、もう、むがむちゅうでした。ふと気がつくと、タルがすこしも動かなくなつていました。今まで、ゆれにゆれていたのが、ピッタリと

まつたので、耳がジーンとして氣味がわるいほど、しづかになりました。すると、またタルがスーツと、もちあげられでもしたように動いて、それから、ゆらゆらとゆれましたが、波に浮いているのと、ちがつたかんじでした。

それから、頭の方で、ガン、ガンと、おそろしい音がしたかとおもうと、サーツと、つめたい空気が、流れこんできました。タルのふたが、ひらかれたのです。賢吉君は、その空気をすつたとき、じつに、おいしいとおもいました。空気が、こんなにおいしいものだとは、ゆめにも知りませんでした。

だれかが賢吉君をだきあげて、タルの外に出してくれました。見ると、それは、服はちがつていましたけれど、さつきの、悪ものの水夫でした。

それよりも、びつくりしたのは、いまいる場所です。そこは、山の中の、ほら穴のようなところでした。でこぼこの、黒っぽい岩のトンネルのようなかんじです。賢吉君は、どうぼうのいわやの中へ、つれこまれたのではないかとおもいました。

逃げだすことは、むろんできません。そばに、悪ものの水夫が、がんばつてゐるし、それに、からだが、くたくたにつかれてしまつて、もう、なにをする元氣もないのです。賢吉君は、タルのそばへうずくまつて、ただ、ぼんやりと、あたりをながめるばかりでした。

そのときです。ふかいトンネルのようになつた、ほら穴のむこうから、ちらつとへんなものが見えました。うす暗いほら穴の中ですから、はつきりはわかりませんが、なんだか、ギヨツとするよな、おそろしいものでした。

びっくりして、その方を見つめていますと、そのへんなものの姿が、岩かどから、ヌーツと、あらわれてきました。賢吉君は、あつとさけんで、おもわず逃げだそうとしました。すると、水夫が、おそろしい力で賢吉君のかたをおさえて、そこへすわらせてしまいました。

「ウフフフ、きみをとつてくうわけじゃない。じつとしてればいいんだ。あれらは、いそぎの用事があつて、これから出かけるんだからね。」

そのものが、もう全身をあらわして、こつちへ近づいてきます。それは、あのおそろしい鉄の人魚でした。人間とおなじぐらいの大きさの、鉄のウロコの怪物、頭から、背中にかけて、鉄のトサカのような、するどいギザギザがあり、目は青く光つて、口は耳までさけ、そこから二本の牙が、ニユーツとのぞいています。

その怪物が、鉄の手で、岩の上を、はつてくるのです。ワニのような長いしつぽがついていますが、そのしつぽの下に、みじかい足のようなものがあり、二本の手と、その足と

で、自由に、はいまわるのです。

賢吉君は、岩壁に、ピツタリ身をつけて、おびえきつて怪物を見ていましたが、怪物のほうでは、賢吉君など、見むきもせず、そのまえをとおつて、ほら穴の外へ出ていつしました。

すると、またほら穴のおくに、なにか物の動くけはいがしました。はつとして、その方を見ますと、さつき出ていったのと、まつたくおなじ鉄の人魚が、もう一びき、のつそりと、そこから出てきたではありませんか。

いや、一びきではありません。つぎからつぎと、おなじ怪物が、まるでアマゾン川のワニの行列のように、ぞろぞろと出でくるのです。賢吉君は、あまりのことに気がとおくなつて、それをかぞえることもできませんでした。ほんとうは、八びきの鉄の人魚が、賢吉君の前をとおつて、ほら穴の外へ出ていったのです。

まるで、おそろしいゆめを見ているようでした。鉄の人魚は一びきだとおもつていたのに、こんなにたくさん、ほら穴の中に、かくれていたのです。そして、ぞろぞろと、どこかへ出ていったのです。

いつたい、なにごとがおこるのでしよう。

あの怪物どもは、もしや、ハヤブサ丸の金塊ひきあげ作業を、じやましに、出かけたのではないでしようか。あんなたくさんのが、海の中で、あはれまわつたら、いつたい、どんなことになるのでしよう。

賢吉君はもう、ものを考える力もなくなつて、ぼんやりしていますと、水夫がかたをついて、

「さあ、おくへいくんだ。首領が、お待ちかねだ。」

と、みようなことをいいました。「首領」とは、いつたい、何者でしよう。

賢吉君は、そのまま、水夫につれられて、ゴツゴツした岩の上を、ほら穴のおくへ、あらいていきました。

まがりくねつたほら穴をしばらくいくと、にわかにパツと明るくなりました。そこは、ほら穴がひろくなつて、岩にかこまれた部屋のようなところでした。りつぱな、ほりもののあるテーブルがあり、その上に、西洋の燭台しょくだいがおかれ、三本のローソクが、もえていました。

テーブルのよこに、これも、ほりもののある大きないすがあつて、全身まつ黒のおそろしい人が腰かけていました。

黒ビロードのずきんを、頭から、スッポリかぶっています。そのふくめんの目と口のところだけが、三角がたに、切りぬいてあり、その穴の中から、ぶきみに光る目が、じつと、こちらを見ています。からだには、やはり黒ビロードの、だぶだぶのマントのようなものを、きていました。これが、「首領」なのでしょう。

「宮田賢吉をつれできました。」

水夫が、うやうやしく、おじぎをしていました。

「うん、よくやつた。やつぱりタルにつめたのか。」

まつ黒な怪物が、太いしわがれ声でたずねるのです。

「はい、ハヤブサ丸の水夫にばけて、こいつをタルにつめて、それから潜航艇にしばりつけて、ここまでひっぱつてきたのです。船のやつらは潜水作業にむちゅうで、だれも気づいたものはありません。」

「よし、よし、うまくやつた。もうこれで、だいじょうぶだ。……おい、賢吉君、なにも、そんなにこわがることはない。きみは、だいじな人じちだからね。ここであそんでいてくれればいいのだ。きみのおとうさんが、わしのいうことを、しちょうちしたら、きみをかえしてやるよ。」

黒い怪物は、ふくめんを三角に切りぬいた口から、ネコなで声で、いうのです。

賢吉君は、おもいきつて聞きかえしました。

「おとうさんに、なにをさせるのですか。どうしたら、ぼくをかえしてくれるのでですか。」
すると、黒い怪物は、ウフフと気味わるく笑いました。

「それがききたいのか。なかなか勇氣のあるぼうやだね。それはね、大洋丸の金塊をぜんぶ、わしによこせというたのみだよ。そのたのみをきいてくれたら、きみをかえしてやるのだ。それまでは、ここにじつとしているんだよ。」

ああ、賢吉君は、おそろしい人じちにされてしまったのです。それにしても、この黒い怪物は、何者でしよう。そして、賢吉君の運命は、これからどうなつていくのでしよう。また、さつき、ほら穴を出ていつた八びきの鉄の人魚は、いつたい、どんなおそろしいことを、はじめるのでしよう。

消える魚形艇

ハヤブサ丸では、やつと、準備がおわって、五人の潜水夫が、ちらばつた金塊をあつめ

るために、海底へおりていきました。もう夜の八時ごろでした。海はまつくらです。

鉄の網も、ロープをとりかえて、潜水夫といつしょに、しづめました。水中電灯をさげた五人のものは、海底の金塊の箱を見つけだしては、その鉄の網の中へはこぶのです。

一時間もかかつて、やつと八つの箱を、鉄の網にいれました。さいしょ、網にいた箱は、十五でしたが、そのうちの七つは、落ちるときに、こわれてしまつて、中の金の棒がバラバラになり、海底の砂の中にうずまつてしまつたので、きゆうにさがしだすことができません。それで、八つの箱を網にいれると、潜水夫のひとりが、潜水カブトのなかの電話で、ひとまず、それを引きあげてくれるよう、ハヤブサ丸につたえました。

ハヤブサ丸の甲板では、その電話をきくと、鉄の網のロープを、機械でぐんぐん引きあげました。こんどは、さつきのような大ガニもあらわれず、八つの箱は、ぶじに甲板についたのです。

海底にのこつた五人の潜水夫は、つぎに、バラバラになつて、砂にもぐつている金の棒をさがしあはじめました。砂ばかりではありません。海底には、コンブのような海草が、たくさんはえていますから、その中へ沈んだ金塊をさがすのは、ひどくほねがおれるのです。しかし、五人のものは、ひとつでも多くさがしだそうと、むちゅうになつて、まつ暗な

海底を歩きまわりました。

水中電灯は、いくら明るくても、三一四メートルしか、てらしませんので、まるで、墨ぼくじゅう汁の中を歩いているようなものです。なかまの潜水夫の姿さえ、少しも見えません。ボーッと光つた水中電灯が、あちこちに動いているばかりで、人の形までは見わけられないのです。

ふと気がつくと、むこうの方から、二つのまるい光が、ひじょうなはやさで近づいてきました。水中電灯ではありません。もつと強い光です。それが、またたく間に、すぐ目の前にせまつてきました。

「あつ、魚形潜航艇だつ。」

ひとりの潜水夫が、おもわずさけびました。その声が、ハヤブサ丸の甲板の受話器にひびきました。

甲板では、ひとりの技師が受話器を耳にあてていましたが、そのさけび声をきくと、すぐには、船長につたえました。船長は無電技師に、みかたの潜航艇へ、そのことをしらせるように命じました。敵の魚形艇を追つぱらうためです。

海底では、魚形艇は、潜水夫たちの、すぐまえに、近づいていました。ギラギラ光る二

つの目玉が、あたりをぼーっとらしているので、魚形艇の全体の姿が、おぼろげに見わけられるのです。

潜水夫たちは、それを見たとき、あまりのおそろしさに、からだがしごれたようになつて、さけぶことも、にげだすことも、できなくなつてしましました。魚形艇の長い背中に、見るもぶきみなばけものが、かさなりあつて、とりついていたのです。それは八ぴきの鉄の人魚でした。まつたくおなじ形の、あのおそろしい怪物が、ウジヤウジヤと、かたまつていたのです。

魚形艇は、スーツと、頭をさげて海の底とすれすれまで、おりて来ました。するとその背中にかたまつっていた八ぴきの怪物が、ぴよいぴよいと、海底にとびおりたのです。そして巨大なワニのようなかつこうで、潜水夫たちの方へ、はいよつてくるではありませんか。

「わー、引きあげてくれえ！ 鉄の人魚がやつてきた。はやく、はやく。」

五人の潜水夫たちが、口々に、わめきました。その声が、ハヤブサ丸の受話器にガンガンとひびくのです。

技師はいそいで、機械係に、引きあげのあいづをしました。ガラガラとロープがまきあげられます。

やがて、五人の潜水夫は、ほうほうのていで、ふなばたにはいあがつて来ました。そしてカブトをぬがせてもらうと、海底のおそろしいありさまを、くわしく報告するのでした。いっぽう、みかたの潜航艇は、ハヤブサ丸から無電の命令をうけて、すぐさま、潜水夫のもぐつている場所へ、いそぎました。

そこへついたときには、ちょうど、八ぴきの鉄の人魚が海底におりたところでした。敵の魚形艇は、はやくも、こちらの潜航艇に気づいて、いきなり逃げだしました。

ギラギラひかる二つ目玉の怪魚と、それを追う三つ目玉の潜航艇、両方とも、全速力で、海の底を走るのです。海底のさかなどもは、時ならぬ巨大な怪物の襲来にあわてふためいて、逃げまど。それが二つの潜航艇のヘッドライトにてらされて、金色に、銀色に、チラチラと、美しくひらめくのです。

二つの艇のあいだは、五十メートルほど、へだたつていました。にげる魚形艇は、みさきの海岸の方へ、まつしぐらに走つていたのですが、もうすこしで、海岸にとどきそくなつたところで、ふつと、その姿が見えなくなつてしましました。

二つの目玉の電灯を消したのだろうと、こちらのヘッドライトで、そのへんいつたいを、くまなくさがしました。でも、あの大好きな魚形艇が、かげも形も見えないので。海の水

にとけてしまったようにあとかたもなく、消えうせたのです。

そのへんの海底は、でこぼこした岩ばかりで、なかには小山のような大きな岩もあります。敵はその岩のかげに、かくれているのではないかと、ながいあいだ、ぐるぐるまわつてさがしましたが、どこにもいません。

そんな大きな魚形艇が、そんなにうまく、かくれられるものではありません。ゆうれいのように消えてしまつたとしか、かんがえられないのです。

しかたがないので、そのことを、ハヤブサ丸に無電でしらせておいて、味方の潜航艇は、そこをひきあげることにしました。

それにしても、魚形艇は、いつたいどうしたのでしょうか。あんな大きなものが、海底の砂の中へもぐるわけにはいきません。コンブなどの林も、魚形艇をかくすほど大きくはありません。もしや海面に浮きあがつたのではないかと、こちらも、浮きあがつてみましたが、やつぱり、かげも形もないのです。

海底の魔術です。鉄の人魚の怪物団は、ふしぎな魔術をこころえていたのでしょうか。

「ハヤブサ丸の無電室は、味方の潜航艇から、魚形艇が消えうせたという知らせをうけました。だが、それにおどろくひまもなく、やがて、どこからか、みような無電がはいってきました。」「ハヤブサマル、ハヤブサマル」と、なんども、よびだしをかけてから、おなじもんくを、くりかえし、うつてきました。

「ミヤタケンキチクンハ、アズカツテイル、タイヨウマルノ、キンカイゼンブト、ヒキカエニ、ケンキチクンヲカエス。ショウチシナケレバ、ケンキチクンノイノチハ、ナイモノトオモエ、ヘンジマツ」

無電技師は、それをかきつけた紙を持つて、甲板の船長のところへ、とんできました。「なに、賢吉君をあずかっているだつて？ 宮田さん、賢吉君はどこにいるんです。へんな無電がきましたよ。」

そこにいた宮田さんと明智探偵が、船長の手から、その紙をうけとつて、おそろしいもんくを読みました。

「賢吉は、じぶんの船室へいくといつて、さつき、おりていつたままですが。」

宮田さんが、まっさおになつて、つぶやきました。

「じゃ、船室へいってみましょう。」

明智はそういって、いきなり船室へおりるハツチの方へ、とんでいきます。宮田さんも、そのあとから走りだしました。

しばらくすると、明智探偵と宮田さんが、甲板にかけあがつてきました。

「船室にはいません。みなさん、賢吉少年がいなくなつたのです。手わけをして、船の中を、さがしてください。」

明智がさけびました。それから、おおさわぎになつて、船員たちは、いく組にもわかれで、船の中のあらゆる場所をさがしましたが、少年の姿はどこにもありませんでした。

「へんですよ。水夫の北川もいなくなつてます。もしやあいつが……。」

ひとりの船員が、報告しました。

「そうだ。あいつが、敵のまわしものだつたかもしれない。賢吉君がひとりで、船から姿を消すはずはないのだ。」

船長が、くやしそうに、さけびました。

「魚形潜航艇の中へ、さらわれたのかもしれませんよ。われわれは、みんな潜水の仕事のほうに集まつていたので、反対がわに、潜航艇が浮きあがつて、賢吉君を乗せていつても、

だれも気がつかなかつたでしようからね。」

技師がじぶんの考え方をはなすと、みんなも、たぶんそなうだらうと思ひました。

「しかし、無電の返事をうたなれば、賢吉がどんなめに、あうかもしれません。といつて、金塊をわたすわけにはいかないし、明智さん、どうしたものでしようね。」

宮田さんが、青い顔をして明智に相談しました。

「あすまで、返事を待つてくれといふ無電をうつておくのですね。そのあいだに、ぼくは、ちよつとやつてみたいことがあるのです。ひよつとしたら、うまく賢吉君をとりもどすことができるかもしれません。」

明智は、なにか、自信ありげに、いうのでした。

そこで、船長は技師をよんで、あしたまで、返事をまつてくれといふ無電をうたせました。

「明智さん、やつてみたいとおつしやるのは、どういうことですか。」

船長がたずねますと、明智は、おもいもよらぬことを、いいだしました。

「今夜のうちに、そつと上陸しようとおもうのです。ボートでは、敵にさとられる心配がありますから、やはり、潜航艇に乗つて海岸に近づき、あとは、岸まで泳げばよいのです。

小林をつれていきます。あすの昼まえにはかかるつもりですが、もつとおそくなるかもしれません。ぼくの帰るまで、無電の返事は、のばしておいてください。」

みんなが、いくらたずねても、明智は、それ以上は、なにもいいませんでした。しかし、宮田さんも船長も、名探偵のうでまえを、よくしっていましたから、ふかくもたずねないで、明智の上陸にさんせいしました。

それをきいた小林少年は、大よろこびです。先生とふたりで、潜航艇に乗り冒険にでかけるのかとおもうと、うれしくてたまりません。

それから、ふたりが出発したのは、もう、真夜中すぎでした。ハヤブサ丸からボートをおろし、すぐそばに浮きあがつている潜航艇に乗りうつりました。艇はすぐに潜水して、出発し、十分もかからぬで海岸につきましたが、そのへんはさびしい岩ばかりの海岸で、さんばしもありませんから、よこづけにすることはできません。岸から百メートルもはなれたところに、浮きあがりました。

明智探偵と小林少年は、服もシャツもぬいで、くつといつしょに小さくまるめ、それを頭の上にくくりつけて、海の中などびこみました。

そのへんは、見あげるばかりの岩のきり岸で、その下に、荒波がおしよせ、まつしろに、

あわだつています。きり岸にかこまれた中に一ヵ所だけ、岩のひくくなつたところがあり、小さい漁船などは、そこへつくようになつていきました。ふたりは、その船つき場にむかつて、ぬきてをきつて泳ぎだしました。

明智探偵はもちろん、小林少年も水泳はとくいでしたから、荒波をものともせず、グングン泳ぎきつて、岩の岸に、よじのぼりました。そして、そこで、からだをふいて、シャツと服をきると、だんだんになつた岩を、上までのぼり、まつ暗なあれ地を、近くの漁師の部落にむかつていそぎました。そのへんは、田も畠もない、あれ地で、漁師の家が、五—六けん、かたまつているばかりの、ほんとうにさびしい部落でした。その五—六けんの家も、みんな、寝しづまつて、まつ暗で、シーンと、しづまりかえつてゐるのです。

ふたりは、その一けんの家を、たたきおこして、たくさんのおかねをだして、漁師の服をゆずつてもらい、着ていた服をぬいで、それときかえました。つまり、漁師の親子に変装したのです。きたないカーキ色のズボン、やぶれてつぎのあたつたシャツ、頭にはてぬぐいの鉢^{はち}まきという、いでたちです。

「どうも、顔が白すぎるね。すこし、おけしょうをしたほうが、いいだろう。」

明智は、そんなことをいつて、漁師の家のかべにたまつていたススを手につけて、じぶ

んの顔と、小林少年の顔に、ベタベタぬりつけました。これで、ふたりは、すっかり漁師らしくなったのです。

それから、そこにこしかけて、そのへんの地理を、くわしくたずねました。こんどの冒険には、やはり、土地のようすを、よくしつておかねばならないからです。

そうして話しているうちに、東の空が、ボーッと、明るくなつてきました。太陽が出るまえのうす明かりです。

そこで、ふたりは漁師に、おれいをいつて外に出ました。もう、足もとが見えないほどではなく、いくら歩いてもあぶなくはあります。ふたりは、海岸にそつて、テクテクと歩きだしました。

一直線に歩くのではなくて、松の林があれば、その中をしらべ、こだかくなつた丘があれば、そのまわりをしらべ、地面に穴があれば、その中をのぞくというふうに、なにかをさがしながら歩きまわるのでした。

海の方をながめると、ハヤブサ丸の船体が、ボーッと黒く見えています。そのハヤブサ丸が、いちばん近くに見えるところにきますと、明智探偵は、今までよりは、いつそう注意ぶかく、そのへんの地面をしらべていましたが、ふと立ちどまつて、むこうの松の林

を見つめました。

そこには大きな松の木が五——六本はえて、その下に、せいのひくい木が、いっぱいしげつっていました。名探偵は、そのしげみの中に、なにかをつけたのです。

「しづかに、音をたてないように。」

小林少年に、そつとささやいて、そこに近づくと、松の木の太いみきのかげに、からだをかくして、むこうのしげみを、すかして見るのでした。

まだうす暗い夜あけまでしたが、じつと見ていると、だんだん目がなれて、そのへんがはつきり見えてきました。

「おや、こんなところに、モグラがいるのかしら？」

小林少年は、おどろいて、そこを見つめました。しげみの中の草が、グラグラと動いているのです。獵犬のようにするどい明智探偵は、さつきから、それに気づいていたのでしよう。

草は、ますますひどく動きだしました。六十センチ四方ほどの地面が、草といつしょに、グーッと、もちあがつてくるのです。そして、あつとおもうまに、その草のはえた土が横に動いて、そのあとに、まっくらな四角い穴がひらきました。

それから、じつにふしぎなことが、おこったのです。その四角な穴から、なにものかがニユーッと、首をだしたではありませんか。それはモグラではなくて人間の首でした。

その人間の首は、用心ぶかく、キヨロキヨロと、あたりを見まわしていましたが、こちらのふたりには、すこしも気づかず、だれもいないとおもつたのか、そのまま、穴からはいだしてきました。その男は、やっぱり、そのへんの漁師のようなふうをしていました。三十五—六の強そうな男です。

これはいつたい、どうしたわけなのでしょう。海岸の地面の中から、ひとりの人間が、わきだしてきたのです。この男は、ツチグモのように、土のなかに住んでいるのでしょうか。あの黒い穴の下には、なにがあるのでしょう。そこは防空壕^{ぼうくうごう}のようにひろくなつて、人間のすまいになつてでもいるのでしょうか。

穴から出たあやしい男は、草のはえた土を、もとにもどして、穴のふたをしました。それから、もう一度、よくあたりを見まわして、どこへいくのが、いそぎ足に歩きだしました。

明智探偵は、それを見ると、小林少年のうでを突つついて、あいだをしました。そして、あいてにさとられぬように、そつと、男のあとを尾行しはじめたのです。

あやしい男は、海岸の反対の方角へ、どんどん歩いていきます。そちらには、さつきの部落とちがつて、もっと大きな漁師村があるのでした。

その道に、こだかい丘が、そびえていました。男はテクテクと、その丘の下を歩いています。そのとき、明智探偵はまた小林少年のうでを突つきました。そして、いきなりかけだしたのです。

おそろしい早さです。まるで、くろい風が吹きすぎるように吹きました。小林君もつづいて、いつしようけんめいにかけだしました。

明智の黒いかげが、パツと、あやしい男のうしろからとびかかりました。そしてあつという間に、男は、そこへねじふせられてしました。

はだかの勇士

明智探偵は、なんのために、その男をとらえたのでしょうか。また、その男をどこへつれていくて、なにをしたのでしょうか。それはしばらく、おあずけにしておいて、お話をそれから五一六時間たつた、その日のおひるごろのできごとに、うつります。

沖にてい泊しているハヤブサ丸では、宮田さんや、船長や、サルベージ会社の技師や、そのほかおおくの船員が、甲板にあがつて、海面を見つめていました。

岸の方から、一その小船が、ハヤブサ丸をめがけて近づいてきたからです。その船には、おとなと子どもと、ふたりの漁師が乗っています。おとなのはうが、ろをこいでいるのです。

まもなく、小船はハヤブサ丸のすぐ下まできました。そして、甲板の人たちにむかつて、手をふりながら、大きな声でどなっています。

「はしごを、おろしてくれ。」

見もしらぬ漁師が、ハヤブサ丸に、乗せてくれといつてゐるのです。

「おまえは、だれだ……。なんの用事があるんだ……。」

甲板から、だれかが、大声でたずねました。

「ぼくは明智だ。よく顔を見てくれ。ここにいるのは小林だよ……。」

甲板の人たちは、明智探偵ときいて、びっくりしてしまいました。しかし、よく見ると、顔は黒くよごれているけれど、明智にちがいないことがわかりましたので、いそいで、はしごをおろしました。

漁師姿の明智と小林少年とは、はしごをのぼって、甲板にあがり、宮田さんや船長や技師などといつしょに、下の船室へはいりました。そして、三十分ほど、なにか相談をしていましたが、それがおわると、明智探偵は、なにか大きな黒いふろしきづつみを、こわきにかかえて、甲板にあがつてきました。そして、小林少年といつしょに、また、もとの小船に乗りうつって、そのまま岩ばかりの海岸にむかつていきました。

ふたりが帰つてしまふと、ハヤブサ丸の中は、にわかにさわがしくなつてきました。船長が、船員や水夫たちを呼びあつめて、ある命令をくだしました。すると、船員や水夫は、いそがしそうに、あちこちと歩きまわつてなにかのよういをはじめたのです。まるで戦争でもはじまるようなさわぎです。

無電技師は、みかたの潜航艇を無電で呼びかえし、まもなく、あの小型潜航艇が、ハヤブサ丸のすぐそばに、浮きあがりました。すると、ハヤブサ丸のボートがおろされ、十三人の、はだかの船員や水夫たちが、そのボートに乗りこみました。ズボン下ひとつのみぱだかです。みんな、肩のきん肉がリュウリュウともりあがり、うでには大きな力こぶのある強そうな人たちばかりです。

そのはだかの人たちはみんな、背中に酸素のボンベをつけ、水中めがねをもち、足のさ

きには、大きな水かきをはめ、手には、みような形の水中銃を持っていました。

ボートはロープで潜航艇のうしろにつながれ、やがて、潜航艇は、海面に浮きあがつたまま、ボートをひっぱつて、どこかへ出発するのでした。

それから二十分ほどたつたころ、潜航艇は、みさきのすぐそばの、岩ばかりの海底にしずんで、ヘッドライトの三つ目を、ギラギラとひからせていました。

そのむこうの断崖のようになつた岩に、大きなほら穴があるのです。ゆうべ、敵の魚形潜航艇が、とつぜん、消えてしまつたのは、このへんでした。そのときは、ほら穴の前にそびえている岩山に、へだてられて、ほら穴が見えなかつたのです。

さつき、明智探偵は、敵の魚形艇が消えたへんに、きつとほら穴があるから、さがすよううにと、いいのこしていきましたので、みかたの潜航艇が、それをさがしまわつて、やつとみつけたのでした。そのほら穴は、魚形艇が、やつとはいれるほどの大きさです。おくの方はまつくらで見えませんが、ひじょうにふかい洞窟のようです。ボートに乗つて、みかたの潜航艇にひかれてきた、十三人のはだかの勇士はボートから海底にもぐつて、洞窟の入口のまわりを、泳ぎまわつています。

ゆうべ、ハヤブサ丸のそばの海岸にあらわれた、鉄の人魚たちは、そのへんにちらばつ

ていた金の棒をひろいあつめて、やはりこのほら穴の中へ、もどつてゐるにちがいないのです。その鉄の人魚どもが、いつまた出てくるかもしません。もし出できたら、水中銃でうつてやろうと、はだかの勇士たちは待ちかまえているのです。

十三人ははだかの勇士が、水中めがねをつけ、ボンベをせおい、足には大きな水かきをつけ、水中銃をかまえて、ほら穴の上下左右を、じゅうおうに泳ぎまわつてゐるありさまは、じつにいさましい光景でした。あるものは、洞窟にもぐりこんで、中のようすを、しらべようとしています。

明智探偵の報告によつて、賢吉少年も、この洞窟の中に、つれこまれてゐることがわかりましたので、あわよくば、洞窟のおくふかく泳ぎこんで、賢吉少年をさがしだそうしているのです。

それにしても、賢吉君は、洞窟の中で、怪物団のために、どんなひどいめにあつているのでしようか。

洞窟のろうべく

そのとき、賢吉少年は、洞窟の中のろうごくにおしごめられていきました。

はだかの勇士たちが、泳ぎまわっているほら穴は、おくへ行くほど広くなつていて、そこに敵の魚形艇がかくれているのですが、さらにおくへ進みますと、穴がだんだん上方へむかつて、やがて海面よりも高くなり、もう水のない洞窟になつていて、しょうにゆう洞のように、いりくんだぬけ道があり、ところどころに、部屋のような広い場所もあります。鉄の人魚の怪物団は、この、人の知らない洞窟をみつけて、そこを、根城ねじろにしていたのです。

まがりくねつた枝道のひとつに、二畳ほどの部屋のようなくぼみがあつて、そのまえに、スギ丸太をたてよこに組みあわせたろうやのこうしのようなものが、たちふさがつています。洞窟の中のろうごくなのです。

そのまづくらなろうごくの中に、学生服をきた、ひとりの少年が、しょんぼりとうずくまつっていました。それが賢吉少年でした。たべものは、ちゃんと、はこんでくれますし、べつにひどいめにあうわけではありませんが、こうしの中に、とじこめられていのですから、どこへも行くことができん。はなしあいてもなく、なにも見えないまづくらな中に、じつとしているほかはありません。じつにさびしいころぼそい身のうえです。

「いまごろ、小林さんや明智先生は、どうしているのかなあ。ぼくがここへつれられてきたことは、だれもしないにきまつていて。いくら名探偵の明智先生でも、気がつかないだろう。ああ、おとうさんにはいたいなあ。ぼくはなぜハヤブサ丸なんかに乗りこんだのだろう。よせばよかつた。そうすれば、いまごろは、東京のおうちに、おかあさんといつしょにいられたのだ。」そうおもうと、賢吉君はいきなり、「おとうさん、おかあさん⋮⋮。」と大きな声でさけびたくなりました。そして、両方の目から、あつい涙が、あふれだしてきて、ポロポロと、ほおをつた落ちるのでした。

ふと気がつくと、こうしの外の岩壁に、チロチロと光がさしていました。だれかが懷中電灯をてらして、こちらへやつてくるらしいのです。「賊の手下が、たべものを持つてきたのかしら。」とおもいましたが、それにはまだ時間がはやいのです。

「ひよつとしたら、こうしの外へつれだされて、ひどいめにあわされるのではあるまいか」

ふと、そう考えると、賢吉君は、もう、おそろしくてしかたがありません。おもわず、ほら穴のすみつこへ身をぢぢめて、ブルブルふるえていました。

でこぼこの岩壁に、反射する光はだんだん強くなり、やがて、むこうから、怪物の目玉

のような懐中電灯が、ユラユラとゆれながら近づいてきました。

それを見ると、賢吉君の心臓は、まるでたいこでもたたくように、おそろしい早さで、うちはじめました。

懐中電灯は、賢吉君のいるろうぐくのこうしのまえで、ピッタリとまりました。そして、岩のろうぐくの中を、ズーッとひとわたり、てらしてから、そこへきた男は、じぶんの顔の方へ、光をあてて見せました。いつも、たべものをはこんでくれる、賊の手下です。

その男は、右手で懐中電灯を持ち、左手では、子どものからだぐらいもある大きな黒いふろしきづつみを、かかえていました。それは、なんだか、えたいのしれない、氣味のわるいかたちのものです。

賢吉君は、あの黒いふろしきづつみの中には、いつたい、なにがはいつているのだろうとおもうと、いつそうおそろしくなつて、からだがブルブルふるえてくるのでした。

「賢吉君……。」

その男が、よびかけました。やさしい声です。賢吉君は、「おやつ、へんだな。」とおもいました。いつもの男の声とは、まるでちがつていたからです。

「わしだよ、わしだよ。惡ものに変装しているけれど、よくじらん、わたしは明智だよ。」

それをきくと、賢吉君は、ハツとしておもわず立ちあがりました。そして、こうしのそばによつて、男の顔を見つめました。賊の手下とそつくりに変装していましたが、よく見ると、明智先生でした。うすぐろくぬつた顔の中から、あのなつかしい明智先生のおもかげが、スーツと、うきだすように見えてくるのでした。

「あつ、先生！」

賢吉君は、こうしにとりすがつて、おもわずさけびました。

「そんな大きな声を出しちゃ、いけない。わたしはきみを、たすけだしにきたのだ。いまに小林も、ここへくるからね。」

明智探偵は、そういつて、懐中電灯を高くあげて、トンネルのようになつた、ほら穴の向こうの方にむかつて、二一三度ふりてらしました。

すると、それがあいだつたらしく、まつくらな向こうの方から、何者かが近づいてきましたが、それが明智の懐中電灯の光の中にはいると、漁師のような着物をきた、ひとりの少年でした。

「おやつ、へんな子どもがきたな。」とおもつて、よく見ますと、その子どもも顔を黒くぬつていましたが、どこかに小林君のおもかげがありました。やつぱり小林少年の変装姿

だつたのです。

「あつ、小林さん……。」

賢吉少年は、また、さけばないではいられませんでした。

明智探偵は、よういして いたかぎをとり出して、ろうごくのこうしの戸をひらき、小林少年とふたりで中へはいつてきました。

「賢吉君、ぶじでよかつたね。」

小林少年は、いきなり賢吉君にだきついていきました。賢吉君も小林少年にとりすがつて、まるで、ひきしぶりにであつた兄弟のように、だきあつたまま、いつまでもはなれないでのでした。

「賢吉君、これから、きみをたすけだすのには、いろいろトリックをつかわなければならない、なかなかむずかしい仕事なんだよ。それに、ぐずぐずしていて敵にみつかったら、たいへんだから、おおいそぎでやらなければならない。くわしい話はあとですることにして、すぐにトリックにとりかかるよ。まず、きみは小林君と服をとりかえるんだ。」

明智探偵はそういうつて、じぶんも手つだつて、手ばやく、ふたりの服をとりかえさせました。つまり小林君は学生服をきて賢吉君になりすまし、賢吉君は小林君のきてきた漁師

の子どもの着物をきたのです。

きがえがすむと、明智はふところから、ぬれた手ぬぐいを出して、ススをぬつた小林君の顔を、きれいにふきとり、そのよごれた手ぬぐいで賢吉君の顔を、なでまわしました。すると、今まで、きたなかつた小林君の顔がきれいになり、きれいだつた賢吉君が、日にやけた漁師の子どもに、早がわりしてしまいました。

「賢吉君は、わたしといつしょに、陸のほうにひらいている穴から逃げだして、船に乗つてハヤブサ丸に帰るんだ。わたしも、この服をぬいで、漁師の着物をきるから、漁師の親子が船に乗つているとおもつて、だれもうたがわないのだよ。」

明智はそういつて、さつき、左手にかかえていた、大きなふろしきづつみを、賢吉君になりました小林少年にわたしました。

「いいかい。これでうまくやるんだよ。わたしは、じきに帰つてくるからね。それまで、きみのうでまえで、うまく敵をあやつつておくのだよ。」

「はい、だいじょうぶです。きつとうまくやります。」

小林君は、げんきよくこたえました。

それから、明智探偵は、こうしの外に出て、そのちかくの岩あなの中にかくしておいた

漁師の着物ときかえ、賢吉少年をつれて、岩のトンネルをグルグルまわりながら、陸地にひらいている、れいの小さな穴の方へいそぐのでした。

それからしばらくすると、賊の洞窟の中に、なんだか、えたいのしれない、きみようなことが、おこりました。

賊の手下のひとりが、懐中電灯を持つて、岩のトンネルの中を歩いていますと、向こうの方に、黒い人かげのようなものが、チラッと動くのが見えました。なんだか、ひどくせいいのひくい、子どもみたいなやつです。賊の手下は、おやつとおもつて立ちどまりました。「あんな小さなやつは、なかまにはいなはづだ。ひよつとしたら、賢吉のやつが、こうしをやぶつてにげだしたのじやないかしら。」

もしそうだとすれば、たいへんです。その男はキツとなつて、いきなり、その黒い人かげをおつかけました。

「おい、そこにいるのは、だれだ。まてつ、またないか。」

懐中電灯をふりてらして走りましたが、小さな人かげは、まるでリスのようにすばやくて、迷路の洞窟の中を、グルグル逃げまわるので、とうとう見うしなつてしましました。

「チエツ、すばしつこいやつだ。だが、もしあれが賢吉だつたとすれば、ろうのこうしの

中が、からつぽになつてゐるはずだ。よしつ、それをたしかめてみよう。」

男は、そうおもつて、ろうびーくの方へいそぎました。そして、こうしの外に立つと、懐中電灯で中をてらして見ましたが、ふしぎなことに、賢吉少年は、ちゃんとそこにいたではありませんか。岩べやの向こうのすみつこに、首をうなだれて、じつとうずくまつてゐるのです。

男は、中にはいつてしらべてみようとおもいましたが、こうしの戸には、大きな錠がついていてかぎがなくてはひらくことができん。そのかぎは明智探偵のばけていり、あのジャンパーをきた賊の手下が持つてゐるのです。そこで、男は、その手下をさがすために、みんなのいる広い洞窟の方へ、かけだしました。

岩のトンネルをかけていますと、またしても、向こうのやみの中に、小さい黒い人かげが、チラツと見えました。いそいで、その方に懐中電灯をむけました。すると、パツと、まがりかどのもこうへ、姿をかくしましたが、そいつは、賢吉少年とそつくりの学生服をきていました。せいのたかさもおんなじです。

男は、ゆめでも見ているような、へんな気持になりました。賢吉少年がふたりになつたのです。ひとりはかぎのかかつたこうしの中にうずくまつてゐる。ひとりは、洞窟の中を、

自由じざいにかけまわっている。こんなふしぎなことはありません。男はなんだか、気味がわるくなつてきました。そこで、その男は、いきなり、黒ふくめんの首領の部屋へかけこんで、ことのしだいをつげますと、首領は、みんなで、かぎを持つてゐるジャックを、さがすように命令しました。

しかし、賊の手下たちが手わけをして、三十分ほども洞窟の中をさがしまわつても、きみような子どもも、ジャックも、どうしても、みつからないのでした。

その搜索がむだにおわつて、また三十分もたつたころでした。ひとりの手下が、首領の部屋にかけこんで、あわただしく報告しました。

「首領、きました、きました。賢吉のかかりのジャックのやつが、どこからか、ヒヨツコリ帰つてきました。いまここへやつてきます。」

ジャックというのは、ろうゞくのこうしのかぎを持つてゐる男のあだなです。

その報告が、おわるかおわらないうちに、首領の部屋の入口へ、ジャックがスーツと、姿をあらわしました。ジャンパーにカーキズボンの、あの男です。

首領はジャックを、テーブルの前によびつけて、しかりつけました。

「ジャック、どこへ行つてたのだ。おまえをさがしだしてから、もう一時間にもなるぞ。いつたい、そんな長いあいだ、どこへ、あそびにいつていたんだ。」

首領の前に立つたジャックは、にやにや笑つて、頭をかきました。

「村へ行つて、漁師のうちで、ごちそうになつたもんだから、つい、おそくなつて……。」

「なんだと？ 村へあそびにいつた？ ようじをすませたら、すぐ帰れど、あれほどいつてあるじやないか。漁師なんかとつきあつて、このかくれがを感じかれたら、どうするんだ。」

「へえ、もうしわけありません。これから、気をつけます。」

ジャックは、うつむいて、しんみようにしています。

「おまえは、ろうやのかぎを、あずかつてゐるんだろう。そのろうやに、へんなことがおこつたのだ。賢吉のやつが、ろうやをぬけだしたらしい。洞窟の中に、チョロチョロと姿をあらわすのだ。だが、あの子どもは、いつのまに、そんなにすばしつこくなつたのか、みんなが、おつかけても、どうしても、つかまらないのだ。」

ところが、ろうやへいつて、こうしの中をのぞいて見ると、賢吉はちゃんと、その中にうずくまっている。なんだかわけがわからないのだ。みんなは、賢吉がふたりになつたといつてはいる。だが、そんなばかなことはない。どちらかが、にせものなんだ。それで、ろうやにいる賢吉をしらべようとしたが、ろうやの戸をひらくかぎがない。かぎはおまえがもつてているからだ。さあ、すぐになろうやをしらべてみよう。まさか、かぎをなくしあしまいな。」

「へえ。それは、ちゃんと、ここに持つております。じゃあ、ろうやへ、おともしましょう。」

ジャックは、そういつて、さきにたちました。ふくめんに黒マントの首領は、そのあとからついてきます。

ふたりは、まつ暗な岩のトンネルをとおつて、ろうやの前に来ました。ジャックがかぎで、ろうやの戸をひらき、ふたりはその中に、はいりました。

みると、賢吉少年は、いわやのすみつこに、うつむいて、うずくまっています。ふたりが、はいつてきても、身うごきもしません。眠っているのか、それとも、死んでしまったのではないかと、思われるほどです。

首領はツカツカと、そのそばによつて、うつむいている賢吉君の頭をおさえて、グツと顔を、あおむけましたが、その顔を、一目みると、

「あつ。」

と、声をたてて、タジタジと、あとじさりをしました。それは人間の顔ではなかつたからです。ジャツクも、それを見てびっくりしています。

ふたりは、なぜそんなに、おどろいたのでしょうか。それは生きた人間の顔ではなくて、マネキンの顔だつたからです。洋服屋のショーウィンドーにかざつてある、子ども人形の顔だつたからです。

首領は、人形だとわかると、はらだたしげに、ひきちぎるように、うわぎをぬがせましたが、からだはワラのたばでできていることがわかりました。ワラたばに洋服をきせて、賢吉少年に見せかけてあつたのです。

「賢吉のやつ、こんな人形でまかしておいて、やつぱり逃げだしたんだな。ちくしょうめ。」

いきなり、ワラたばをひきだして、ふみにじりました。そのひょうしに、人形の首がとれて、コロコロところがり、まるで少年が、首をきられたように見えました。

それにしても、人形の首や、ワラたばは、いつたい、だれが持ってきたのでしょうか。また、人形に服をきせて逃げだした賢吉少年は、いつたい、なにをきているのでしょうか。

首領は、ふしきでたまらないという顔つきで、首をかしげました。

しかし、読者諸君は、よくぞんじです。賊の手下のジャックにばけた明智探偵が、ハヤブサ丸から人形の首や、ワラたばをろうやの中にもちこみ、賢吉君の服をそれにきせ、賢吉君には小林少年がきていた漁師の子どものをきせ、明智じしんも漁師の着物をきて、ほんとうの賢吉君は、船にのせてハヤブサ丸へつれてかえったのです。

ですから、洞窟の中にチラチラと、姿を見せている子どもは、賢吉君ではなくて小林少年なのです。小林少年が賢吉君の服をきて、ばけているのです。

しかし、賊の首領は何もしりません。洞窟の中がくらいのと、明智の変装のうまいので、首領は、ほんとうのジャックだと、思いこんでいるのです。

「よし、おれが、じぶんで、賢吉をつかまえてやる。まだ洞窟の中にいるにちがいない。ジャック、おまえも、てつだえ。」

首領はろうやを出ると、まつ暗な岩のトンネルの中を、グルグルと歩きはじめました。ジャックがうしろから懷中電灯をてらして、ついていきます。

しばらく歩いていきますと、むこうのほうを、小さな黒いかげが、サッとよこぎるのが見えました。

「や、いたぞ。あれが賢吉にちがいない。もう、のがさないぞ。」

ふくめんの首領は、黒いマントをひるがえして、そのほうへ走りだしました。ジャックも、あとにつづきます。

「いる、いる。あすこを走つている。たしかに賢吉のやつだつ。」

首領は、いつそう足をはやめました。子どもとおとなですから、かけっこには、かないません。追うものと、追われるもののあいだは、みるみるせばまつていきました。ああ、あぶない、賢吉君にばけた小林少年は、いまに、つかまつてしまふのではないでしようか。「あつ、あいつ階段をのぼつている。洞窟の外へ、逃げだす気だなつ。」

首領が、走りながら、いまいましそうに、いいました。その石の階段の上には、れいの陸上にひらいている、小さな穴があるのです。

首領は、とぶように、階段にかけつけ、下から少年の服をつかもうとしました。もう三十分ぐらいで、手がとどきそうです。

しかし、少年のほうが、すばやかつたのです。かれは地上への出口の、草のはえたかた

い土のかたまりをおしのけて、パツと穴の外へ、とび出してしまいました。

ふくめんの首領は、すぐそのあとから、穴の外へ、顔を出しましたが、そこをひと目みると、ハツとして首をひとつこめてしまいました。

穴の外に、おそろしいものがいたからです。どうして、いつのまに、やつてきたのか、穴の外の林の中に、制服の警官が五一六名、ズラツとならんで、こちらをにらんでいたのです。賢吉君になりました小林少年は、その警官のまんなかにはざまれて、にこにこして立っていました。

「たいへんだつ。警官が来た。ジャック、にげるんだ。はやく、にげるんだ。」

首領は、おおいそぎで、石の階段をかけおり、ジャックをおすようにして、洞窟のおくのほうへかけだしました。

ふたりは、グルグルまがつているトンネルの中を、死にものぐいで走りました。そして、ついたところは、海のほうに近いひろい洞窟でした。そこには、あのおそろしい八匹きの鉄の人魚が、ウジヤウジヤかたまつて、すんでいるのです。

ひろい洞窟の中を八ぴきの鉄の人魚が、オリの中の野獸のようにかたまつていました。鉄でできた、おそろしい顔に、リンのように青くひかる大きな目、口は耳までさけて、そのくちびるのあいだからニユーッと牙がつきだしています。全身に、鉄のウロコがはえ、頭から、背中にかけて、するどい鉄のトサカのようなギザギザがつづいています。胴体としつぽは、ワニとそつくりで、それが、やつぱり鉄でできています。大きさは、人間のとなよりも大きいのです。

一ぴきでもおそろしいのに、そういう怪物が八ぴきもウジャウジャかたまつてているのですから、そのぶきみさは、想像もできないほどです。

ふくめんの首領は、ジャックの持つ懐中電灯の光をたよりに、その怪獣のいわやへ、はいつていきました。そして、鉄の人魚たちにむかって、大きな声で、命令しました。

「おまえたち、よくきけ。陸の入口から、いまに警官がふみこんでくる。おまえたちは、とちゅうまでいつて、あいつらを、攻撃するんだ。ひとりのこらす、穴の外へ、おい出してしまえ、そして、穴には中から大石をつめて、二度と、はいつてこられないようにするんだ。わかつたか。さあ、みんないつしょに、でかけるんだ。」

鉄の怪物どもは、首領の命令を、だまつて聞いていました。そして、しばらくのあいだ、シーンと、しずまりかえっていたかとおもうと、やがて、「ジャ、ジャ、ジャ、ジャ、ジャ。」というたくさんの鉄が、一度にすれちがうような、おそろしい音がおこりました。

鉄の人魚どもが、声をそろえて笑っているのです。

「こらつ、おまえたち、どうしたというのだ。おれがわからないのか。なぜ笑うのだ。なぜ、おれの命令にしたがわないのだ。」

首領が、おそろしい声でどなりました。しかし、鉄のすれあう音は、しずまるどころか、ますます、はげしくなつていきます。怪獣は、首領をばかにして、いつまでも、笑いつづけているのです。

「きさまたち、気がちがつたなつ。よし、おもいしらせてやる。」

首領はいきなり、くつばきの足をあげて、すぐそばにいた、一ぴきの人魚の顔をパツとけりました。

すると、にわかに、「ジャ、ジャ、ジャ、ジャ。」という音が、ものすゞいちようしにかわって、八ぴきの鉄の人魚が、四方から、首領をめがけて、おそいかつてきました。

かれらの目のリンのような光は、パツと、もえたつように強くなり、するどい牙を、ガ

チガチと、かみならし、するどいツメのはえた、両手をひろげて、首領のまわりをとりかこみ、いまにもくいつきそうな、ものすごい形相をしめしました。

さすがの怪物団の首領も、それを見ると、ゾッとしたよう立ちはぐくんでしまいました。どうして、こんなことがおこつたのか、さっぱりわけがわかりません。部下の人魚どもが、にわかに首領にそむくとは、いつたい、どうしたわけなのでしょう。

すると、そのとき、またしても、ふしぎなことがおこりました。

「ジャ、ジャ、ジャ、ジャ、ジャ……。」と笑っていた怪獣の声が、とつぜん、「ワハハハハ……。」という人間の声にかわつたのです。八匹きの人魚が、人間のように笑いだしたのです。洞窟もゆれるばかりの、おそろしい笑い声でした。

それから、ガチヤンガチヤンというやかましい音がしたかとおもうと、人魚どもの腹のところが、二つにわれて、その中から、はだかの人間がとび出してきました。

「ワハハハ……、どうだ、おどろいたか。おれたちは、きみの部下じやないぞ。ハヤブサ丸からやつてきた、八人の勇士だ。」

鉄の人魚の中から、まつさきにとび出した、ひとりの若ものが、どなりつけました。なるほど部下ではありません。八人が八人とも、まったく見しらぬ人間ばかりです。それを

見ると、ふくめんの首領は、あつと立ちすくんで、口をきく力もなくなつてしましました。「アハハハ……、びっくりしているな。鉄の人魚なんて、おもちゃみたいなもんだ。鉄板でこんな形をつくつて、中に酸素のボンベが三本もとりつけてある。だから、長いあいだ水中にいても、へいきなんだ。その中へ、きみの部下がはいつて、われわれを、おどかしていたんだ。目がリンのように光るのは、乾電池で青い豆電灯がついているんだ。

明智先生が、ちゃんと、それを見ぬいてしまつた。そして、おれたち、はだかの勇士を海のそこへ、おくつてよこしたんだ。おれたちはボンベをしょつて、海のそこの洞窟の入口から、しのびこんだ。そして、水中銃で八人のきみの部下をおどかし、人魚の鉄の皮をぬがせて、おれたちがいれかわつたんだ。きみの八人の部下は、手足をしばり、さるぐつわをはめて、むこうのほうの岩あなに、ころがしてあるよ。ワハハハハ……、どうだ、おどりいたか。」

ふくめんの首領は、こんなひどいめにあつたことは、今までに一度もありません。おぞろしい敗北です。しかし、ぐずぐずしている場合ではありません。八人のはだかの勇士が、いまにも、こちらへ、とびかかつてきそうに見えるからです。「ジャック、ついてこい。」

首領は、そうさけぶと、パツと身をひるがえして、矢のように走りだしました。しかしこんどは、いつたい、どこへ逃げようというのでしょうか。

かれは黒いマントをひるがえして、海のそこへの、出口のほうへ走りました。ジャツクもそのあとからつづきます。

しばらく走ると、パツと、目のまえが、ひろくなりました。そこには、海底からはいつてきた水が、池のようになつてているのです。ひろい洞窟の中の池です。海底からの入口は、水面のずっと下にあるのですが、洞窟がななめに上のほうへつづいでいるので、そのへんは、もう水面の上にあり、海水は池のよう、洞窟のそこにたたえられているのです。

その池の岸に、小さいクジラほどもある、まつくるなものが、浮いていました。賊の魚形潜航艇です。その背中に、すきとおつたコブのようなものがあります。それはプラスチックのガラスでできた展望まどです。また、それはちようつがいで上にひらくようになつていて、艇への出入り口もかねています。

ふくめんの首領は、ジャツクをひきつれて、その岸へ走つていきました。

「さあ、これにのるんだ。そして、海のそこへ逃げだすんだ。」

そういつて、水岸においてあつた長い板を、魚形艇の背中にわたし、その上を歩いて、

ガラスの展望まどのところへ行つて、それをひらくと、いきなり、艇内へすべりこんでいました。

「ジャック、おまえもはいれ。そして、これを運転するんだ。」

首領によばれて、ジャックも板をわたり、艇内にすべりこんだのです。そして、展望まどを、しつかりしめ、運転席についたかとおもうと、とんきょうな声をたてました。

「あ、首領、たいへんだ。機械がメチャメチャにこわれています。」

「えつ、機械が？」

首領もそこへとんできて機械をしらべましたが、何者かが、かなづちで、たたきこわしてたらしく、とても、きゅうに修繕することはできません。

「しかたがない。さいごの逃げ場所だ。」

首領が、したうちをして、どなりました。

「えつ、さいごの逃げ場所とは？」

「このむこうに、おれだけが知つて いる洞窟の枝道がある。そこへ、逃げこむんだ。」

ふたりは、いそいで展望まどをひらき、もとの岩ぎしにもどりました。

そして、洞窟のうしろのほうを見ると、八人のはだかの勇士と警官たちが、懷中電灯を

てらして、こちらへ、いそいでくるようです。

「さあ、はやく、こつちだ。」

首領はジャックに声をかけて、かけだしました。そして、かどを一つまがると、岩のくぼみに立ちどまりました。そして、そこの岩のさけめに手をかけると、力まかせにひっぱつて、ほぼ約六十センチほどの岩をうごかしました。すると、そのうしろに人ひとり、やつと通れるほどの穴がひらいていたのです。

「はやく、ここへはいれ。そして、岩をもとのとおりにしておくんだ。そうすれば、だれも気がつきやしない。おれたちはたすかるのだ。」

ふたりは、その穴の中にはいり苦心をして、岩をもとの場所にもどして、ふたをしてしまいました。

巨人と怪人

「この穴は、おくが深いし、いくつも枝道がある。もうだいじょうぶだ。けつして、見つかる心配はない。」

ふくめんの首領は、岩あなを、おくのほうへ、歩きながら、じしんありげに、いうのでした。

「だが、ふしきですね。陸のほうの出口からは、おまわりが、はいつてくるし、鉄の人魚の中には、敵のやつらがはいつているし、魚形潜航艇は、いつのまにか機械がこわれているし、いつたいどうしたというのでしようね。」

うしろから、首領のあとを追いながら、ジャックが声をかけました。

「うん、どうも、みんな、明智小五郎のしわざらしい。あいつが、どうかして、この洞窟を見つけたのだ。そして、いろんなことを、たくさんだのにちがいない。それにしても、わけがわからないのは、賢吉のやつだ。あのおとなしい子どもが、いつのまに、あれほど、すばしっこくなつたのか、じつに、ふしきだ。」

岩あなのでんじようが、グツと、ひくくなつてきたので、首領は、背をかがめて歩きながら、うしろのジャックに話しかけます。すると、ジャックは、なにがおかしいのか、クスクス笑つて、

「あんたは、まだ、そのわけが、わからないのですかい？」

と、みようなことを、いいました。首領はその声を聞くと、びつくりしたように立ちど

まつて、ジャックの声のするほうを、ふりむきました。

「なんだつて？ それじや、おまえには、わかっているのか。」

「わかつてますよ。あの子どもは賢吉じやないのです。」

「えつ、賢吉じやない。それじや、あれは何者だつ。そして、賢吉はどこへ行つたのだ。」

「賢吉は、おきのハヤブサ丸へ帰りましたよ。」

「どうして、帰つたのだ、まさか、泳いでいったわけじやなかろう。」

「小船にのつて行きました。」

「その小船はどこにあつたのだ。そして、だれが、こいだのだ。」

「明智小五郎が、こぎました。船は漁師から、かりたのですよ。明智と賢吉は、親子の漁師のようなふうをして、われわれの目をくらましたのです。」

それをきくと、首領は、暗やみのなかで、グツとジャックのうでをつかみました。

「きさま、それを知つていて、なぜ、今まで、だまつていたのだ。なぜ、おれに、知らせなかつたのだつ。」

「これには、わけがあるのです。あとで説明します。それより、ここはどうも、きゅうくつですね。もつと広いところへ出ましよう。」

「うん、すこしおくへ行けば、また広くなる。こっちへ、くるがいい。」

首領はそういうて、さきにたつて、からだをまげながら前にすすみます。十メートルも行くと、広い洞窟に出ました。

「さあ、ここなら、いいだろう。で、賢吉がハヤブサ丸へ逃げたとすると、さつき、おれが追っかけた子どもは、いつたい何者だ？」

「明智小五郎の少年助手の小林です。」

「えつ、あれが小林だつて？」

「そうですよ。賢吉では、とても、あんなに、すばしっこく働けませんからね。つまり、こういうわけです。明智小五郎は、小林と、マネキンの首と、ワラたばを持つて、洞窟にしのびこんだのです。そして、ワラたばに賢吉の服をきせ、人形の首をすげて、ろうやのすみにすわらせておき、賢吉には漁師の子どもの着物を着せて、ハヤブサ丸へつれて帰つた。そのあとで、小林が洞窟の中を走りまわつて、賢吉がふたりになつたように、見せかけたというわけです。」

「だが、待てよ。いつたい明智は、どうして、ろうやの戸をひらいたんだ。こわれていないのを見るとかぎでひらいたとしか考えられないが。そのかぎはおまえのほかには持つて

いなはばずだ。おまえ、まさか、明智にかぎを、かしたわけじやあるまいな。」

「そうですよ。かしたおぼえはありませんよ。」

「それじや、明智はどうして、ろうやの戸をひらいたんだ。」

「首領、なぞですよ。ちよつと、おもしろいなぞですよ、とけませんかね。」

「このバカにしたようなことばに、首領はおこり出しました。」

「こらつ、ジャック、きさまは、おれをなぶる氣か。なぞなぞあそびをやつてる場合じやないぞ。きさまは、なにかまだ、おれに、かくしているな。」

ジャックは、へいきで、しゃべりつづけます。

「つまり、こういうなぞですよ。かぎは一つしかない。そのかぎは、このジャックが持っていた。ところが、ろうやの戸をひらいたのは明智小五郎だつた。この算数のこたえは、どういうことになるのでしょうかね。」

暗やみのなかで、首領はだまりこんでいました。ギョツとして、ことばも出ないです。やがて、首領のふるえ声が聞こえきました。

「それじやあ、きさまは……。」

「ハハハ……、わかつたようだね。そのこたえは、ジャックと明智とが、おなじ人間だつ

たというのさ。おなじ人間だから、かぎをかりなくても、よかつたのさ。」

パツと洞窟の中が、明るくなりました。ジャツクが、懐中電灯をつけて、じぶんの顔を見てらしたのです。そのまるい光のなかに、ジャツクではなくて、あのモジヤモジヤ頭の明智小五郎の顔が、にこにこ笑っていたではありませんか。

やみの中でカツラをとり、つけまゆげをはがし、顔のけしょうをふきとつて、もとの明智に、もどつていたのです。

「きさま、やつぱり、明智だつたなつ。」

懐中電灯の光が、首領のほうへ向けられました。黒ふくめんの怪人は、両手をひろげ、いまにも明智につかみかかるうとする、おそろしい姿をしていました。

「やつとわかつたね。きみにしては、ずいぶん、気づくのが、おそかつたじやないか。だが、まだなぞがのこつている。それじやあ、ほんもののジャツクはどこへ行つたのか。いつ、ジャツクとぼくどが、いれかわつたのか。きみはそれを知りたいだらう。

ぼくは、この洞窟には、きっと、陸上へのぬけ道があるとおもつた。それで土地の漁師に変装して、海岸のがけの上をさがしていると、あの林のなかのぬけあなから、ジャツクがはいだしてきた。

ぼくはジャックのあとをつけていつて、ふいに、うしろから、おそいかかって、しばりあげてしまつた。そして、むこうの村の警察へ、つれていつたのだ。そのときから、警察とは、ちゃんと、うちあわせがしてあつたのだよ。

ぼくは一度ハヤブサ丸に帰つて、十三人のはだかの勇士を、海底の洞窟の入口から、しおびこませた。鉄の人魚の中にはいつていたきみの部下を、やつつけたのは、その勇士たちだ。

それから、ぼくはジャックに変装し、小林をつれて、陸のほうから洞窟にはいり、賢吉君をたすけ出して船に乗せ、ハヤブサ丸に、おくりとどけた。そしてまた、ここへ帰つてきた。ジャックの姿がしばらく見えなかつたのは、そのためだよ。

ハハハヽヽヽ、氣のどくだが、鉄の人魚怪物団もこれで全滅だね。」

懐中電灯のまるい光は、さつきから、ずっと、ふくめんの首領をしてらしていました。かれは、まるで黒い石にでもなつたように、身動きもしないで、だまりこんでいるのです。明智は、なお、ことばをつづけました。

「きみは鉄の人魚を発明して、世間をあつといわせようとした。うすい鉄のよろいのなかに、酸素のボンベをとりつけて、中にはいった人間が、水のそこでも、へいきでいられる

ようとした。

そういうおそろしいやつが、海の中から、ヌーッとあらわれてきたので、それを見た人は、ほんとうの怪物だとおもつた。新聞でも、さわぎたてた。

きみはどうかして、大洋丸の金塊の秘密を、かぎ出して、船長の遺言書を、ぬすもうとしたが、失敗した。そして、賢吉君のおとうさんの宮田さんが、金塊ひきあげをやることになり、ハヤブサ丸が、このおきへ、やってきた。

きみは、それを知ると、この洞窟に、ねじろをかまえて、金塊をよこどりしようとした。そこで、海底のたたかいがはじまったのだ。それから、いろいろ、きみようなことがおこつた。ぼくたちは、この洞窟の秘密を知らなかつたので、ひじょうにふしぎな気がした。だが、どうとう、ぼくがこの洞窟を見つけた。そして、ジャックにばけて、ここへはいつて、さぐつてみると、きみのたくらみや、鉄の人魚の秘密が、すつかりわかつてしまつた。

そして、ぼくが勝つたというわけだよ。ところで、いよいよ、きみのそのふくめんを、ぬいでもらおうか。ふくめんの下に、ほんとうのきみの顔が、あるかどうかわからないがね。」

そういうつたかとおもうと、明智はサツと首領にとびかかって、黒ビロードのふくめんを、引きちぎるように、はぎとつてしましました。

「二十面相だ！ やつぱりきみだつたねえ。」

懷中電灯の光の中に、あらわれたのは、怪人二十面相、あるいは怪人四十面相の、見おぼえのある顔のひとつでした。それが、ほんとうの顔かどうかは、わかりませんが、まえの事件のとき、一度見たことのある顔でした。

そういうわれて、二十面相は、いちじはギョツとしたようですが、すぐ、気をとりなおして、ふてぶてしく笑いました。

「ウフフフ……、明智先生、しばらくだつたなあ。で、きみはこれから、どうするつもりだね。」

「きまつてているじやないか。きみを警察にひきわたすのさ。」

「ウフフフ……、いい気なもんだねえ。おれが、おとなしく、きみにつかまるとでも思つているのかい。」

「こうするのさ！」

明智がパツと、二十面相に、くみつこうとすると、あいては、スルリと、その手の下を

くぐつて、いきなり洞窟のおくの方へ逃げ出しました。

おばけガニのさいご

明智は、懐中電灯をふりてらして、そのあとをおいました。が、二十面相の足は、ひじようにはやく、むこうの岩かどを、まがつて、見えなくなつてしましました。

明智が、その岩かどまで走つていきましたと、岩あなが、ふたつに分かれていました。二十面相は、どちらへ逃げたのか、わかりません。明智がそこで、ちょっとためらつていたので、ふたりのあいだは、ますます、へだたつてしましました。

しかたがないので、一方の岩あなを、懐中電灯でてらしながらすすんでいきましたが、二十メートルもいくと、そこが、いきどまりになつていきました。

おおいそぎで、ひきかえし、もとの分かれみちに、もどりました。そして、もうひとつの岩あなへ、はいつていきました。しばらくすすみますと、むこうの方に、なにかもやもやと、うごめいているものがあります。

ひどく大きな、氣味のわるいものでした。明智は電灯の光を、その方にさしつきました。

すると、もやもやしたもののが、はつきり見えてきました。

それは、人間の二倍もある、巨大なガニだつたのです。それが、とび出した二つの目で、こちらをにらみつけ、大きなハサミを、ふりたて、ぶきみな八本の足で、ガサガサと、むこうのほうへ、はつていくのです。

おばけガニです。明智は、じぶんの目では見ていないのですが、いつか、ハヤブサ丸の金塊ひきあげのロープを切つてしまつた、あのおばけガニです。

ほんとうに、そんな大きなガニが、いるわけはありません。鉄板でつくつたガニです。そして、その中に二十面相がかくれているのでしょうか。

明智が、その方へ近づくと、おばけガニは、サッとにげ出し、こちらが立ちどまると、ガニも、とまつて、とび出した目玉を、クルクルまわし、巨大なハサミをふりたてて、「ここまでおいて。」というような、かつこうをします。

おばけガニは、八本の足で、よこばいをするのですから、とても、にげあしがはやくて、さすがの明智にも、なかなかつかまりません。

ほら穴は、のぼり坂になり、だんだん、それが、きゅうになつてきました。明智は、大ガニを、どこまでも追つていきます。

「こちらがパツと、とびつくと、カニのほうは、ガサツとにげる。それはやいこと、どうしても、つかまりません。

ふと、きがつくと、むこうのほうが、ボーッと、明るくなつてきました。おやつ、へんだなと思って、よく見ますと、このほら穴には出口があつて、そこから、外の光がさしこんでいるのでした。ずいぶん、坂道をのぼつたのですから、その出口は、よほど、高いところにひらいているものでしよう。

おばけガニは、おそろしい、はやさで、その出口にむかつて、つきすすんでいきました。そこには、ちようどトンネルの出口のように、まるい穴がひらいていて、まぶしいほどの明かるさです。

巨大なカニの、みにくい姿が、その出口に、まつ黒なかげになつて、立ちふさがつたかとおもうと、穴の外へ、サツと、消えてしましました。

明智は、おどろいて、その穴にかけより、外をのぞいたのですが、ひと目みると、クラツと目まいがして、おもわず、首をひつこめました。

その出口は、たかいたかい断崖の上にひらいていたのです。きりたつたような岩が、はるか下の方までつづいて、そこに、あわだつ海がありました。海面から何十メートルとい

う高さです。

そつと、首を出して見ますと、おばけガニは、そのまっすぐの岩はだに、八本の足でつかまって、下へ下へと、おりていきます。ほんとうのカニではありませんから、そんなにうまく、岩がつかめるものではありません。いまにも、すべりおちそうで、見ているだけでも、お尻のへんが、くすぐつたくなるようです。

「あつ！」

明智は、おもわず、声をたてました。おばけガニが、ズルズルと、すべったのです。一度すべりだせば、とても、とまるものではありません。八本の足が、岩はだから、はなれてしまつて、大ガニは、サーッと、下へ落ちていきました。そして見る見る、かたちが小さくなり、あわだつ海の中へ消えてしまいました。

海に落ちても、大ガニのなかの二十面相は、死ぬようなことはなかつたでしよう。いつかもの大ガニは、海の底を、へいきで歩いていたのです。きっと、カニの中にも、酸素のボンベがついていて、二十面相は、それでいきをして、海の底を、はいまわることができるのでしよう。

かれは、そうして、どこかへ、逃げてしまうのではないでしようか。しかし、用心ぶか

い明智探偵は、こういう場合も、ちゃんと、考えにいれていきました。

さつき、入口の岩を動かして、この岩あなにはいつたとき、大いそぎで、手帳の紙をやぶつて、鉛筆でなにか書いて、それを岩のすきまから、外へ落としておいたのです。

首領を追つかけてきた八人の勇士や、小林少年が、それを見つけたに、ちがいありません。そして、そこに書いてある、さしずに、したがつて、八人のはだかの勇士は、水中メガネと、ボンベと、水かきをつけて、海底の洞窟の外へ泳ぎだし、そこに待つていた五人の勇士と、いつしょになつて、敵が海底に、姿をあらわすのを待ちかまえていることでしょう。

それは、明智が考えたとおりにはこびました。十三人のはだかの勇士は、洞窟の入口のあたりを、かつぱつに泳ぎまわつていたのです。

そこへ、海の上のほうから、大きなものが、はげしいきおいで落ちてきて、スースと海底に沈んできました。見おぼえのある、おばけガニです。

十三人の勇士は、それを見ると八方から泳ぎよつて、おばけガニに、くみついていきました。

うす暗い海底の、大格闘です。大ガニは巨大なハサミをふりたて、八本の足を、めちゃ

くちやに動かして勇士たちをふりほどこうとしましたが、一ぴきと十三人では、いくらおばけガニでも、かなうはずがありません。長い時間の、おそろしいたたかいののち、おばけガニは、とうとうグツタリとなつてしましました。

十三びきのアリがコオロギの死がいを、はこぶようなぐあいに、勇士たちはてんでに、おばけガニの足を、ひつぱつて、海面に浮きあがつてきました。

すると、そこに、みかたの潜航艇が、ハツチのふたをひらいて、まちかまえていたのです。十三人の勇士は、潜航艇にのぼりつき、おばけガニをかついで、ハツチの中へ落としこみました。

それから一時間ほどのち、ハヤブサ丸の甲板には、明智探偵と小林少年と十三人の勇士が、もどつていました。そして、甲板の床には、おばけガニのからが、なげだされ、そのそばに、怪人二十面相が、息もたえだえに、よこたわつていました。

そこには宮田さんや賢吉少年の顔も見えました。それをとりまく、おおぜいの船員は、両手を高くあげて、ばんざいを、さけんでいました。

そののち、大洋丸の金塊が、のこらず、宮田さんの手にはいつたことは、もうすまでもありません。

青空文庫情報

底本：「鉄塔の怪人／海底の魔術師」江戸川乱歩推理文庫、講談社

1988（昭和63）年2月8日第1刷発行

初出：「少年」光文社

1955（昭和30）年1月号～12月号

入力・sogo

校正：大久保ゆう

2016年9月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作成されました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

海底の魔術師

江戸川乱歩

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>